# 横浜美術館美術情報センターにおける資料展示について

興津 美由紀　谷口 和歌子

## はじめに

図書館において、出納やレファレンスは利用者と図書資料を繋ぐ基本的な利用者サービスである。その他にも社会の様々な要請に対応するために、例えば横浜市立図書館の「移動図書館」のように、あらかじめ選抜された図書資料をまとめて利用者の身近に移送し、定期的に仮設図書室を開くなどの活動も行われている。また、図書館（室）の中に特別な場所を設け、資料を展示するサービス（以下「資料展示」）も広く行われている。横浜美術館美術情報センター（以下「当センター」）でも過去様々な資料展示を行ってきたが、平成26年度により積極的な利用者サービスを目指して、新たな視点からこれまでの方法を抜本的に見直し、「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」展を企画実施した。小論では当センターにおける過去の事例も踏まえながら今回の新たな試みを紹介し、「資料展示」の課題と可能性を考察したい。

一般に図書館において「展示」と言う場合、その意味は必ずしも厳密に定義されている訳ではない。管見の限りでは、あるテーマに基づいて選び出された資料を、通常の配架場所から別置することを「展示」と呼ぶ図書館が多いようである。しかしその展示の形式は様々で、机や書架等にブックスタンド等を用いて資料を立てたり、フェイスアウトしたりする場合や、ケースに入れる場合もある。ここでは筆者の職場での呼称に倣い、机や書架等に展示することを「資料コーナー」と呼び、ガラスケース内に展示することを「ケース内展示」と呼ぶこととしたい。この「資料コーナー」と「ケース内展示」を合わせて、「資料展示」と呼ぶ。また、美術館での美術作品の展示は、展覧会もしくは美術展と呼ぶ。

小論の第１章では当センターと利用者サービスの概要、その中で資料展示の占める位置を示す。第２章では平成20～25年度に実施された資料展示について概観し、成果と課題を考察する。第３章では、「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」展について、まず展示テーマとして「焚書」を設定するにあたっての考察過程を述べ、次に展示内容を資料論、展示論に分けて記述する。第４章では本資料展示で実施したアンケート結果を分析する。第５章では実地調査した神奈川県立図書館の事例を分析し、当センターの「焚書展」と比較しつつ今後の展示の指針となり得る取り組み方や様々な工夫について考察する。結びでは当センターにおける資料展示の今後の可能性について所見を述べる。序文、第１～２章、第４～５章、結びを興津、第３章を谷口が執筆した。

## 第１章　当センターにおける利用者サービスの概要と資料展示

### １　当センターの概要

当センターは、横浜美術館内に設けられた美術の専門図書室である[1]。「横浜美術館美術図書室収集方針」に基づき、美術、美術史、絵画、版画、彫刻、写真、建築等に関する資料を収集、整理、保存し、一般利用者（市民や研究者）と当館職員の利用に供している。平成26年12月現在の所蔵冊数は約10

万５千冊を数える（逐次刊行物を除く）。所蔵資料は（表１）の８種類に区分される（平成26年12月現在）。

表１　横浜美術館美術情報センター資料分類

| | 名　　称 | | 所　蔵　数 |
|---|---|---|---|
| 図書資料 ※1 | 和書 ※2 | | 29,000冊 |
| | 洋書 ※3 | | 12,000冊 |
| | 和カタログ ※4 | | 44,000冊 |
| | 洋カタログ ※5 | | 20,000冊 |
| | 逐次刊行物 ※6 | 和雑誌 | 約2,900タイトル |
| | | 洋雑誌 | |
| | | 年報・紀要 | |
| | | ニュース | |
| 非図書資料 | 映像資料 ※7 | ビデオ | 約560タイトル |
| | | DVD | |
| | マイクロ資料 ※8 | ロールフィルム | 26タイトル（701巻） |
| | | マイクロフィッシュ | 13タイトル（2,616シート） |
| | エフェメラ資料 ※9 | 作家ファイル（案内葉書等） | |
| | | 美術館チラシファイル | |

### ２　利用者サービスの概要

当センターの利用者サービスは２種類に大別できる。ひとつは一般利用者および当館職員を対象とした「通常サービス（通常業務）」、もうひとつは一般利用者を対象として司書が特別に企画する事業である。それをここでは仮に「特定普及事業」と呼ぶ。具体的な内容は次のとおりで、「資料展示」は利用者サービスの中の「特定普及事業」のひとつに位置付けられる。

**１）通常サービス（通常業務）**

A　目録の作成と公開[2]

B　開架資料の公開[3]

C　閉架資料の出納[4]

D　レファレンス対応[5]

E　複写サービス[6]

**２）特定普及事業**

A　バックヤードツアーの実施[7]

B　ボランティアの受入れ[8]

C　資料展示

## 第２章　資料展示について

当センターの資料展示は、所蔵資料と利用者を繋ぐことを目的として、司書の手により行われている。司書は学芸員と異なり美術や美術史の専門家ではないが、司書としての業務を全うすべく、作家・作品に関する質問や所蔵資料に関する質問などのレファレンスをはじめとする利用者の多様な要望に応えるよう努力を重ねている。このような立場から自分たちなりの方法で資料展示業務に従事している。

### １　資料展示の形式

当センターの資料展示は「資料コーナー」と「ケース内展示」の２種類の形式がある。以下それぞれ詳細を述べる。

### 1）資料コーナー

資料コーナーとは、特定のテーマに基づいて選定した資料を所定の配架場所から抜き取り、期間限定で開架室にフェイスアウトもしくはブックスタンド等を用いて別置するものである。次の２種類がある。

A　**展覧会関連資料コーナー**（開催中の企画展や横浜美術館コレクション展に関連する資料を年３～４回、展覧会開催中２～３ヶ月間実施する）

B　**特設資料コーナー**（所蔵資料紹介と書庫資料の活用を目的としている。司書がテーマを設定し、年３～10回、１回あたり１～２ヶ月間程度実施する）

平成20～22年度は利用者の目に付き易くまた資料を手に取り易いという利点から、備え付けの閲覧机や長机に資料コーナーを設置した。しかしこの場合、本来利用者のためのスペースである閲覧机を資料コーナーで占領することにもなる。そこで平成22年度以降設置場所を再考し、最終的に別の用途で使用していたスチール製のディスプレイラックを用いることにした。当該ラックの限られたスペースを考慮し、展覧会会期中は展覧会関連資料コーナーを、会期外は特設資料コーナーを交互に設置することとした。

### 2）ケース内展示（平成20～25年度まで）

ケース内展示は特定のテーマに基づいて選択した資料を所定の配架場所から抜き取り、期間限定で閲覧室のガラスケース内[9]に展示する事業である。本来閲覧を目的とする資料をケース内に施錠展示するため、それなりの課題を内包している。当センター開室時から歴代司書が担当してきたが、ここでは筆者が着任した平成20年度以降の過去６年間の概要をたどりながらその課題を述べる。

平成20年度から25年度にかけて計15回のケース内展示を行った（表２ P.48参照）。その内容は方針に応じて次の２つに大別できる。ひとつは「横浜美術館の展覧会の補完･普及のための展示（以降「展覧会補完展示」という）」（20～22年度）であり、もうひとつは「当センターの特色ある図書コレクションを紹介するための展示（以降「蔵書紹介展示」という）」（23～25年度）である。

資料の選択および決定にあたっては、先に述べたいずれの方針に基づく場合においても、①「展示テーマの設定」、②「資料の検索」、③「現物確認」と展示シミュレーションの３つのプロセスを経て行った。これらの順序はケース内展示の内容によって必ずしも一定しない。以下に「展覧会補完展示」、「蔵書紹介展示」に分け、具体的なプロセスおよび成果と課題について述べる。

## 2　ケース内展示①「展覧会補完展示」について（平成20～22年度）

### 1）「展覧会補完展示」の概要

“展覧会に連動した資料展示を行う”という方針のもと、司書が資料コーナーと同様の「当館企画展･コレクション展（美術展）の鑑賞者の理解を助け、様々な資料を通して作家や作品を知っていただく」という目標を設定し、和書を中心にケース内展示を行うこととした。

「展覧会補完展示」では各展覧会の性質や内容に応じて資料選定の方法を変える必要が生じた。具体的には次の２つの場合がある。

A　**対象作家が明白な個展の場合**（そのまま展覧会タイトルを「ケース内展示のテーマ」とし、これをキーワードとして資料を検索し 候補資料を選定する）

**B　対象が広範で抽象的なタイトルの展覧会、グループ展や歴史的・考古的な展覧会、当館収蔵作品を主体に自由な発想で構成された展覧会等の場合**（展覧会に関連する複数のキーワードを切り出して候補資料を探し、最終的にケース内展示独自のテーマを決定する）

展示の内容と質の向上のため、展示資料を選択する過程においてキーワードを何度も設定し直すことがある。例えばより特徴的かつ展示に向く資料が見つかった場合には、その資料に合わせたキーワードに切り替える。

また、資料を探す際は、蔵書検索システムや参考図書・展覧会カタログによる検索、ウェブサイトを利用した雑誌記事検索、当該雑誌の索引・バックナンバーのチェック、「ブラウジング」等の方法のほか、司書の記憶にある特徴的な資料の中から選択する、資料そのものから読み取った情報を基に新たな資料を探すといった方法も用いる。こうして候補資料を集めた後、展示ケースに見立てた同サイズの机上に候補資料を実際に配置してシミュレーションを行う。それにより最終的な点数と配置方法を決定する。また展示にあたっては、①パネル（タイトルと展示の趣旨を記載）、②キャプション（タイトル、出版社、出版年、著者等の書誌情報を記載）の２種類を用意し、必要に応じて補助パネル（資料の内容、種類の表示、展示資料からの引用文等を記載）を組み合わせる。

### ２）「展覧会補完展示」の成果

「展覧会補完展示」では、下記の事例のように内容や形状などが特徴的な資料を用意できれば、利用者や鑑賞者が展覧会に関連した情報を得る機会を提供でき、また当センターの多様な資料を紹介することが可能である。

**（事例）**当館収蔵作品を主体に４人のゲストによる自由な発想で構成された展覧会である「４人が創るわたしの美術館」展（平成20年度）では「川上澄生」を、「横浜美術館全館コレクション展ひびきあう東西の美術―開港から現代まで」（平成20年度）では「恩地孝四郎」を取り上げた。これら版画家にスポットを当てたケース内展示では、作家の著作物（貴重書）をはじめ古い雑誌や案内葉書等様々な種類の資料を加え、小規模ながらもまとまりのある展示となった。版画作品と図書資料は双方の性質上よく馴染み、また資料が潤沢にあったことも成功の理由のひとつに挙げられる。

### ３）「展覧会補完展示」の課題と考察

次のようないくつかの課題も指摘できる。

**A　展覧会とのつながりが明確になりにくい展示となる場合**

歴史的・考古的な展覧会である「ポンペイ展　世界遺産　古代ローマ文明の奇跡」（平成21～22年度）では、タイトルや出品作品などから複数のキーワードを抽出したが当該資料が乏しく、ようやく「フレスコ画」で展示に耐えうる資料として超大型本の『ミケランジェロ・システィーナ礼拝堂』を見出した。しかしミケランジェロは展覧会に出品されてはおらず、フレスコ画も多種多様な出品群の一部分にすぎない。そのため結果的に展覧会とのつながりがわかりにくい展示となった。

これと同様の事例として、同じく歴史的な展覧会である「大開港展」（平成21年度）では、一枚刷りの版画集『東京名所図　小林清親』[10]を展示対象とした。ここでのキーワードは、「明治の浮世絵師」であった。このほか、『フランス絵画の19世紀－美をめぐる100年のドラマ』展（平成

22年度）では、一枚刷りの大判の版画集『ブルターニュの発見』等から、19世紀の版画を展示対象とした。ここでのキーワードは、「19世紀のフランス」であった。

**B　現代作家の個展の場合、ケース内展示の対象資料が非図書資料に限られること**

「金氏徹平：溶け出す都市、空白の森」展、「束芋：断面の世代」展では、案内葉書、リーフレット、チラシ、作家作品を掲載した雑誌の複写などを中心に展示することになった。現代作家の場合は美術史上の大家に比べて単行書籍や画集などの出版物が少なく、また、出版物があっても鑑賞用というよりは読むための資料であるため「資料コーナー」に配架するものが多い。

上記の課題に共通している問題は、展覧会のテーマによっては展示対象となり得る資料が限定され、資料を見出すことが難しくなっているという点である。それはその時々の展覧会のテーマに関連した所蔵資料に多寡があり、さらに展示に向いている形状を持つ資料や貴重書など特徴的な資料が限られていることに起因する。

この３年間のケース内展示は実践を重ねながら、“どのような資料が展示に向いているのか”を模索した過程であったと言える。「資料コーナー」と「ケース内展示」を同時に設置することで、読んでいただく資料とケースで見ていただく資料を選別する基準は次第に明らかになり、ケース内展示の回を重ねる度に、以下のような展示に向いている資料の大まかな基準が見えてきた。

・大判の図版が掲載されている大型本や貴重書、古い雑誌など、利用者や鑑賞者が見て楽しめるもの
・一枚刷り、折り本、巻子本など、一般的な洋装本の資料とは異なる、展示に適した形状のもの

これに対して資料コーナーでは扱いやすいサイズで保存状態が良く、テキスト主体の資料、国内の展覧会カタログ（閉架資料）等が優先される。

## ３　ケース内展示②「蔵書紹介展示」について（平成23～25年度）

### １）「蔵書紹介展示」の概要

「展覧会補完展示」で見えてきたいくつかの課題を踏まえて資料展示を再考した。展覧会関連資料コーナーは継続し、ケース内展示については展覧会と無理に関連づけることをやめ、資料そのものにスポットを当て「利用者に当センターの特色あるコレクションを知っていただくために、最も特徴的な資料を紹介する」という方針を立てた。当センターでは一般図書館に見られない特徴的なジャンルとして、国内外の美術館・博物館・ギャラリー等で発行された約６万４千冊におよぶ「展覧会カタログ」を所蔵しているため、そこに焦点を当てて一連のケース内展示を行うこととした。

一般図書館では展覧会カタログが所蔵されている場合でも一般の図書資料として整理されることが多いが、当センターや東京国立近代美術館アートライブラリ、東京都現代美術館美術図書室などALC（美術図書館連絡会）加盟館をはじめとする美術専門の図書室（館）では、展覧会カタログを一般の図書資料とは別の一ジャンルとして収集、整理、保存していることが多い。展覧会カタログは一般書籍と異なる様々な特徴を持っている。通常は会期中に展覧会会場で販売され、一般書店には流通していない場合が多い。また、ただ１回のみ存在する展覧会の記録として、主催者、開催館展示資料の所蔵先等の表記や研究成果の発表の場として、その時のその分野の最新の情報を盛り込んでいる。書物としての形態にもそれに伴って様々な工夫が施されている。そのことを利用者にご理解いただけるよう企図し、特に装幀や形状に工夫が見られるもの、一見して「一般の本に比べて

変わっている」もしくは外観が「面白い」と思われる展覧会カタログを選び、「美術情報センター所蔵面白カタログ紹介」[11]と題して数回に分けて展示することとした（表２ P.48参照）。

展示候補は過去のバックヤードツアーで紹介した「面白カタログ」や「ブラウジング」で探したほか、蔵書検索で得られた資料の形状、附録等の書誌情報も参考にした。「展覧会補完展示」では専ら和書から資料を探していたが、「蔵書紹介展示」では展示対象を広げ洋カタログも積極的に選ぶようにした。これらの展示候補となる資料を見出すまでの時間は、展覧会を展示テーマとしていた場合よりもかなり短縮される。これは資料のジャンル、形態が予め設定されているということもあるが、所蔵資料そのものを選択の出発点としたことが大きい。

配置方法は個々の展覧会カタログの特徴的な形状を引き立たせ、見る人にその魅力が伝わるように配慮し、以下のように個々の資料の形状に合わせて展示方法を工夫した。

**（事例）**『現代美術のABC　アートはあなたのそばにある』展カタログ

トランプに擬えた33枚のカードと１冊の小冊子で構成され函に納められている。この函から１枚のカードを半分出し、ほか10枚のカードをテキスト部分と図版とを混ぜて並べ円形に配置することにより、大きなトランプカードが函の中から円を描いて飛び出しているように見せた。また、展示期間中幾度かカードを入れ替え、変化をつけた。

ケース内での展示期間中は、対象資料を手に取って読むことができなくなるために、展示対象となったカタログの展覧会の情報（タイトル、会場、会期等）をキャプションに記載した。洋カタログのキャプションは日本語に翻訳した内容で記載した。パネルや補助パネルは「展覧会補完展示」に準じた。

### ３）「蔵書紹介展示」の成果

一般の人が手にする機会の少ない過去の展覧会カタログを展示の主役とすることによってこのジャンルの存在と魅力を示すこと、そして、美術館の機能のひとつとしてのカタログ制作をクローズアップすることで、美術館の図書室ならではの展示とすることがこの展示の目的であった。それ以前の「展覧会補完展示」ではもっぱら内容に注目し、それが展覧会とどのように関連するかを考えていた。つまり資料を情報媒体と考えていたのに対し、対象を展覧会カタログに特化した「蔵書紹介展示」では、資料の書物としての作られ方に注目して展示を構成したことが大きな特徴である。このことにより「情報媒体としての書物」ではなく、「実体としての書物」という新たな視点が得られたことの意義は大きい。美術作品がそれ自体の歴史を持つように、書物にもそれ自体の“もの”としての歴史がある。ものとしての本を主役とすることでも展示は成り立つのである。

### ４）「蔵書紹介展示」の課題と考察

一方で、展示が長期にわたって同一のテーマの下で継続されたために単調な印象を与えたことは否定できない。全会期を通して３回にわたり展示内容を入れ替えたにもかかわらず、各回のサブタイトルを作ることなく、それぞれの特徴や従前の展示との違いを明確に示さなかったために、展示が変わったこと自体が利用者に認知されず、関心を引くことができなかった。一連のシリーズを企画する際、「どの回にどのようなタイプのカタログを集めるか」ということを緻密に計画していれば、それぞれの特徴が際立ち連続展示の単調さは回避できたと考えられる。例えば、金属製、木製、布製など

“紙以外の素材”に着目する、おもちゃ箱仕立ての、もしくはゲームのようなカタログといったデザインのコンセプトに着目するなど、様々な切り口を考えることができる。このように展覧会カタログの「面白さ」の多様な観点を具体的に複数設定することで、このジャンルの広がりと奥深さを表現できただろう。

以上、当センターにおける６年間に亘るケース内展示の概要、経緯を振り返り、成果と課題について考察した。最大の問題である“書物をケースに展示することの難しさ”は依然として残る。有効なケース内展示とはどのようなものなのか。この疑問を踏まえて、平成26年度にこれまでとは異なる構成で、新たな要素を盛り込んだケース内展示を行った。“情報媒体としての書物”と“実体としての書物”の二つの視点から図書資料を活用するべく、司書が独自の調査研究を行いテーマを設定した。「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」と題し、展覧会（ヨコハマトリエンナーレ2014）の開催に合わせて実施した。そこでは、初の試みとして、章の設定、解説パネルの掲出、展示替え、展示資料リストおよび展示関連資料リストの配布を行った。また、当館ホームページ、メールマガジンでの広報に加え、今回初めてチラシを作成して館内外で配布し、市政記者発表、アンケート調査も合わせて行った。

## 第３章　「美術情報センター　ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示『焚書』―禁じられた書物と文化財―」について

### 1　展示テーマとしての「焚書」

今回は、横浜美術館で開催された「ヨコハマトリエンナーレ2014　華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」に関連したテーマで資料展示を行うことになった。会期はヨコハマトリエンナーレのオープンに合わせ、2014年８月１日㈮から11月30日㈰まで[12]とした。展示内容はこれまでの「展覧会補完展示」の場合と同様に出品作家やトリエンナーレの出版物を扱うという選択肢もあったが、従来とは全く異なるアプローチによる展示を試みることとし、企画に取り組んだ。

#### 1）「華氏451」と森村泰昌氏の「焚書」

展覧会タイトルの「華氏451の芸術」とは、レイ・ブラッドベリ（Ray Bradbury、1920-2012）による小説『華氏451度』に由来している。これは書物を摘発して焼き払う「焚書官」を主人公とした物語である。そこに描かれているのは「知性」が否定される社会であり、「知性」を象徴する書物は憎悪の対象として焼かれていく。

「本は、となりの家の装弾された銃みたいなものだ」[13]。

物語の中で「焚書」は、焚書官であった主人公が書物と供に焼かれる人を目の当たりにして、自らも「知の本質を必要としている」ことに目覚めるための、決定的な転機となっている。

横浜トリエンナーレ2014の「タイトルとコンセプト」[14]について、アーティスティック・ディレクターである森村泰昌氏（1951年生まれ）は、この作品に触れて次のように述べている。

いわゆる焚書がテーマの小説で、本を読むことも持つことも禁じられた近未来社会が舞台となっている。〔中略〕物語の後半、「本になる人々」[15]の集団〔ママ〕というものが登場する。〔中略〕「本になる人々」は本を禁止する社会からの亡命者達であり、また上述のように本を非物質な記憶に置き換えようとしているため、その存在と行為の両側面において、現実社会の表舞台には決して現れることのない、不在の人々となる（＝生きている痕跡をこの世から消滅させた「忘却の人々」たらざるをえなくなる）。ところがこの「忘却の人々」にこそ、膨大な本の記憶がたまり込んでいるというのが、ブラッドベリの小説がもたらす、「忘却」に関する重い教訓なのである。

〔中略〕世界（宇宙）は、そのほとんどが「忘却」のブラックホール（あるいは、広大で奥深い海）によって満たされている。それに比べれば、記憶世界など「忘却の海」に浮かぶちっぽけな島にすぎない。

森村氏は、焚書官に追われて自ら書物になろうとした人々を「忘却の人々」と名付ける。彼らこそは「記憶世界にカウントされる値打ちもないと判断された無数の記憶されざる記憶」[16]という、森村氏にとっての展覧会のメインモチーフであり、焚書の炎は、普段は見えないその影を照らし出す光源なのである。展覧会場では大型図書の作品《Moe Nai Ko To Ba》（森村泰昌編、2014年制作）が、説教壇を思わせる階段付きの高い朗読台上に置かれ、その先に十字架を象った彫刻《ビッグ・ダブル・クロス》（Edword & Nancy Reddin Kienholz、1987-1989年制作）が配置された。

森村氏は、展覧会の最終日2014年11月３日に、檀上でそれぞれのテクストの言語でこの「本」を誦読させた後、夕刻に美術館の正面広場に持ち出し、「忘却の海」に見立てた噴水池の中でガスバーナーを使って焼くというパフォーマンス（「消滅のためのラストショー　Moe Nai Ko ToBa を燃やす[17]」）を行った。尊崇の対象であった書物を焼き払うことによって、森村氏は「記憶されざる記憶」、「失われていくすべてのもの[18]」に光を当てようとしたのではないか。

ブラッドベリの『華氏451度』と、森村氏の展覧会コンセプト及びパフォーマンスにみる焚書は以上の通りであるが、果たして現実に起きた焚書は、何を目的として、誰によって行われてきたのだろうか。今回の資料展示では物語としてではなく、歴史上実際に行われた「焚書」とは何かを考える内容で行おうと考えた。

「図書室」で「焚書」を展示テーマとして取り上げることについては、不快に感じる利用者がいるのではないかという危惧があった。現在の日本では焚書は表面上存在しないが、図書館が特定の資料を排斥するという行為は、今なお問題となっている。

「図書館の自由に関する宣言」では、「正当な理由がないかぎり、ある種の資料を特別扱いしたり、資料の内容に手を加えたり、書架から撤去したり、廃棄したりはしない」[19]としている。

この宣言は、図書館が第二次世界大戦前より日本国民に対する「思想善導」機関としての役割を担い、「国民の知る自由を妨げる役割さえ果たしてきた」ことへの反省[20]から、図書館法（1950年制定）では明確にされなかった図書館の使命を確認すべく、全国図書館大会の決議（1954年）として採択されたものである[21]。

しかし、船橋市西図書館蔵書廃棄事件（2001年）[22]や、近年では松江市教育委員会が漫画『はだし

のゲン』（中沢啓治著）の利用制限を市立小中学校に求めた事例（2012年）など、図書館においても人々の表現の自由や知る自由を妨げる事件が起きている。

米国図書館協会（ALA：American Library Association）によれば、「検閲」とは「排他的プロセス」であり、「ある個人または機関が、特定の思想・描写を不快と見なし、それへのアクセスを望まないという理由から思想・描写や情報へのアクセスを拒否し、或いは思想・描写や情報を抑圧する場合」[23]としている。

焚書は図書館のそうした使命に正面から対立する行為であるが、それを理由にテーマから排除したのでは本分にもとることになる。図書館にはいかなる資料や情報も中立的立場で収集・保存し、利用者や後世に伝えていくことが求められる。このような観点からも、当センターにおいて「焚書」を展示テーマとして扱い、歴史的事実として振り返ることには意義があるのではないだろうか。

### 2）「焚書」とは何か

「焚書」展を立案するに当たって、まず「焚書」という言葉が持つ意味から出発した。字義通りにみれば「本を焼く」という意味であるが、辞書をひもといてみると、例えば次のように記されている。

> 政治権力による思想・言論統制策の一つで、書物にもられた思想を禁圧し、その流通、伝播を防止するために、公開の場で当該の書物を焼き捨てる行為、儀式〔後略〕
>
> （『大百科事典』13巻、平凡社、1985年、p.361）

このように一般的に「焚書」といえば、権力者による思想弾圧の一手段とみなされる。「焚」という漢字の意味には、「やく」、「たく」、「もやす」という意味のほか、「ひあぶり」、「焚刑」、「焚殺」という意味もある[24]。即ち「焚書」とは、単に書物を焼くことの他に、衆人環視の中で人を焼き殺す「焚刑」の対象を書物へ置き換えた行為をも意味する。

また、「焚書」を包括する上位の範疇として「禁書」がある。そこで「禁書」の事例も合わせて調査対象とした。

歴史上有名な焚書による弾圧としては、始皇帝による焚書坑儒に触れた李贄（りし）の筆禍事件、乾隆帝による焚書、ナチスドイツによる焚書などの事例が挙げられる[25]。当センターの蔵書体系は美術書が中心であるため、焚書坑儒等の歴史資料や、出版の自由と規制に関する主題[26]の資料が乏しい。そうした事情からも、弾圧としての焚書だけではなく、焚書に類するさまざまな事例へと調査範囲を広げる必要があった。

### 3）焚書をこえて

「焚書」を「書物の破壊行為」として見れば、美術品を含めた「文化財」の破壊についても焚書と類似した背景、もしくは動機を持つと考えられるのではないだろうか。そしてまた破壊の手段も、単に物理的な行為ばかりではなく、先述のトリエンナーレ最終日イベントの「尊崇の対象」から引きずり降ろす行為のように様々な次元が有り得るのではないか。こうした視点から、「対象」を「書物と文化財」へと広げ、手段を「焚書」だけでなく幅広く「毀損」と捉えることとした。「書物と文化財の毀損」というキーワードを設定し、当センター所蔵資料の中から様々な時代や地域の事例を調査し

た結果を示す（表３ P.49参照）。項目は次の通りである。

「書物と文化財の毀損」事例一覧凡例

・歴史事象　：当該資料の事例が属する歴史上の大きなカテゴリー
・紹介事例　：当該資料が指示する歴史事例
・年代　：当該事例の年代（可能な範囲で記述）
・該当資料番号　：表４、表５、表６に付された資料番号を参照。
・主体　：毀損の主体。個人、団体、私的団体（私的に組織された団体）、公的権力（王権、国家権力、教会権力など）、公的機関（教育機関、行政機関など）
・対象　：毀損の対象となったもの。書物（文書、書簡等を含む）、文化財（美術品、建造物、遺跡など）
・方法　：毀損の方法と手段。（焼却、火災、発禁、損壊〔塗りつぶす、ページを破り取るなども含む〕、誹謗中傷、発表禁止、検閲、隠匿（隠滅）、隠蔽、その他
・公開/非公開　：可能な範囲で簡潔に記した。行為の現場の公開・非公開
・目的　：毀損行為の目的・意図（可能な範囲で簡潔に記述）

海外の事例では、東ローマ帝国における聖像禁止令、ルネサンス期フィレンツェにおける神権政治、マルティン・ルターによる宗教改革とその余波、ナチスドイツの文化言論統制と弾圧、スペイン内戦における聖像破壊、19世紀後半から20世紀にかけての欧米における文学作品の発行禁止措置、文化大革命、アフガニスタンのスンニ派過激組織タリバーンによる偶像破壊などの資料を見出すことができた。

日本の事例からは、「神仏判然令」と廃仏毀釈運動、日本の敗戦に伴い教育現場にまで及んだ戦争責任追及の波、占領下の日本における「墨塗り教科書」、戦後日本における文化財焼亡、行政と「母の会」による悪書追放運動、昭和から明治にかけての文学作品の発行禁止処分、芸術活動としての焚書、今日の日本における図書館蔵書の損壊、美術展における作品の一部被覆などの資料を探し出した。

取り上げた事例にみる毀損を実施する「主体」は、国家や権力者に限らず、個人や私的な集団も含まれており、方法や目的も多様である。

「焚書」を「書物と文化財の毀損」という視野にまで拡大することにより、展示に十分な量の図版付資料を用意することができた。美術専門図書室として美術や写真の豊富な図版を掲載した資料を多数所蔵している当センターのイメージバンクとしての特徴が発揮されたと言える。

このように書物や文化財の毀損がさまざまな時代、地域で行われてきたが、一方で、そうした動きに対抗して書物や文化財を守ろうとする活動の記録や同時代の抵抗運動、また毀損の歴史を批判的視点から後世に伝え、忘却から守ろうとする取り組みを示す資料も探し出し、毀損の歴史と合わせて展示することにした。これは一方的な見方に偏ることなく史実をできる限り広い視野で伝える上で不可欠であり、そうした資料を書庫に見出せたことは幸いであった。

以上の観点から、この展示では理由を問わず人為的な「書物と文化財の毀損」全般を扱うこととし、様々な時代を扱った多様な資料を通して、いつ、誰が、何を、何のために、どのように毀損したのかを来館者に考えていただく展示を構成することとした。

展示のタイトルについては、トリエンナーレの副題との関連性を強調するため、「焚書」の言葉を象

徴的に用い、「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示『焚書』―禁じられた書物と文化財―」とした。

## 2　資料論

### 1）展示資料の選択基準

現在所蔵している資料の紹介が目的であるため、他館等からの借用や本展示のための新規購入はない。

表４の中から、貴重書やそれに準ずる資料を中心に、見た目に分かりやすく、内容的によく知られた史実の資料をピックアップするべく、次のような指針を設定した。

A　当センターのコレクションの特色、多様性を示せること

B　図版（美術品や写真など）を掲載し、展示対象として魅力的であること

C　様々な地域、時代の事例を含むこと

### 2）章立と柱となる資料

上記の選択基準からまず柱となる下記の資料を、続いて周辺資料を選定し、展示の章を設定した。時代と地域による分類に基づき、４章構成となった。

第１章：宗教改革期の書物や聖像の破壊

宗教改革期にルターが教皇勅書を焼く図が掲載された“Historische Kronyck”（No.1；（表４ P.50参照）の資料番号。以下同)、宗教改革期の偶像破壊を示す図版が掲載された“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts.”（No.2)。

第２章：第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗

ナチスドイツによる「退廃芸術展」他の写真が収められた“Tag der Deutschen Kunst”（No.4)。

第３章：占領下の日本で教科書や指導書に下されたさまざまな処分

墨塗り教科書に関連して、「中村文庫」（No.11-18)。

第４章：戦後から現代の日本における書物と文化財の毀損

『アサヒグラフ』より、戦後日本の文化財焼失（No.20）と悪書追放運動（No.21)。

### 3）ケース内展示資料目録（出品リスト）

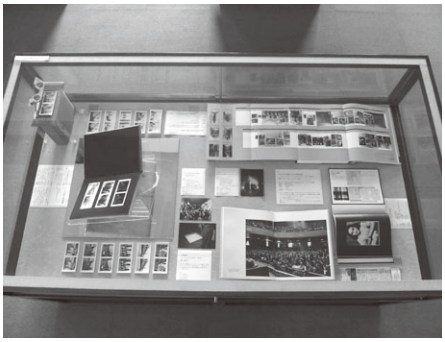
資料目録については「美術情報センター　ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示「焚書」―禁じられた書物と文化財―ケース展示資料目録」（表４）にまとめた。前期10点（fig.1, 2)、後期17点（fig.3, 4)、全21点（前期後期共通資料６点）を出品した。

### 4）各章概要と資料解題

以下に、各章の概要と資料解題を示す。資料解題は執筆のため、今回集中的に調査研究を行った。

以下は本稿のため展示に掲出した解説シートの文章に若干加筆したものである。執筆に当たっては、当該展示資料の他、独自に複数の資料を参照した[27]。

(fig.1)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」（前期）（展示ケース1※）※東側のケース



(fig.2)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」（前期）（展示ケース2※）※西側のケース

(fig.3)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」（後期）（展示ケース1）

(fig.4)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」（後期）（展示ケース2）

**「第１章：宗教改革期の書物や聖像の破壊」[28]（資料No.1-3）**

**概要**

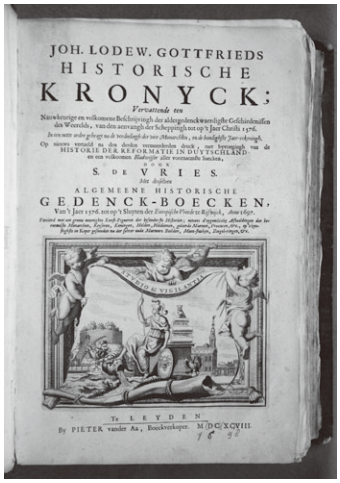
16世紀前半はまさに宗教改革の時代である。ドイツやスイスなどの都市では偶像破壊が起こり、改革派と教皇庁のプロパガンダ戦が激しく行われていた。マテウス・メリアン（1593-1650）によるマルティン・ルターが教皇勅書を焼き捨てる場面を描いた銅版画、エアハルト・シェーン（1500-1542頃）による、人々が聖像を破壊する場面を描いた木版画（図版）《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》、また、同じ作家による、ルターと教皇の対立をテーマとした寓意画《賢者の家と愚者の家、マタイ伝７章より》（同上）を展示した。

(fig.5)
《教会法を焼き捨てるルター博士》

**No.1《教会法を焼き捨てるルター博士》（“Historische Kronyck（史的年代記）”）（fig.5）（解説シート）**

ドイツの歴史家・翻訳家・著述家ゴットフリートが編纂した『史的年代記[29]』は1630年にフランクフルトで

出版され、1660年にオランダ語に翻訳された。オランダ語版『史的年代記』は、江戸時代の蘭学者に広く読まれ、西洋史、特にキリスト教史の知識をもたらした。当センターの『史的年代記』は、ライデンで出版されたオランダ語版の第二版である[30]。標題紙（fig.6）には、天地創造から1576年までのヨーロッパ史を記したものであることと、ドイツにおける宗教改革の歴史を増補した上で、1697年９月20日にレイスウェイク条約（Vrede van Rijswijk）が締結されるまでの歴史を著したことが記述されている。



(fig.6)
“Historische Kronyck（史的年代記）”
標題紙

図の銅版画はルターの宗教改革の一場面を描いたものである。1520年10月10日、ローマ教皇レオ10世はマルティン・ルターに対し、「九十五箇条の提題」を撤回しない場合には破門に処すとの勅書「破門脅迫の大教勅」を発した。撤回期限の1520年12月10日、ルターは公衆の面前で教会法、勅書を焼き払った。翌1521年１月３日、ルターは教会を破門となった。

本書の挿絵を手がけた銅版画家マテウス・メリアンは、1630年に印刷されたルター訳『旧新訳聖書』の挿絵も描いている。

**No.2《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts. 26. Lfg（16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第26巻）”（fig.7）（解説シート）**

ニュルンベルクの画家、版画家エアハルト・シェーンによる木版画。シェーンは、アルブレヒト・デューラーの弟子である。

16世紀ドイツでは、木版画とグーテンベルクの活版印刷術を用いたテクストを組み合わせた「摺り物」が盛んに出版された。宗教改革の勃興期、既存の教会を批判する「摺り物」も数多く作られ民衆の間に広まった。

この「摺り物」の複製は、ドイツの美術史家マックス・ガイスベルクが、デューラーやルターの活躍した時代の「一枚刷り木版画」（Einblatt-Holzschnitt）約1,600点を、原寸大で複製印刷（ファクシミリ印刷）し、全40巻の複製版画集成として出版したものの１葉である。

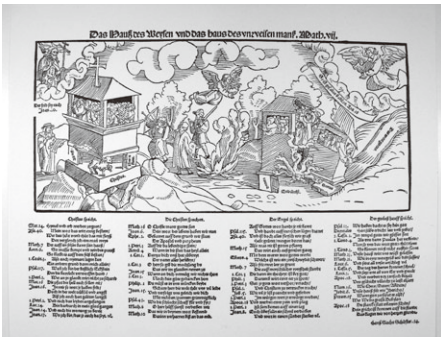
(fig.7)
エアハルト・シェーン
《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》

《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》は、聖像崇拝者が一夜にして破壊者に変貌した時代の人心の荒廃を告発する版画と韻文詩である。画エアハルト・シェーン面左側には、教会から聖像や十字架上のキリスト像を撤去する者、右下には像を火にくべる者がいる。右上には目から角材が突き出た指導者がいるが、これは聖書の一節、「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか」（伝７章５節）に則して描かれた。

**No.3《賢者の家と愚者の家、マタイ伝７章より》“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts. 31. Lfg（16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第31巻）”（fig.8）（解説シート）**

上部にエアハルト・シェーン作の木版画、下部にハンス・ザックス（1494-1576）による四列の詩が印刷されている。ザックスはニュルンベルクの靴屋の親方で、マイスター・ジンガー（名歌手）と呼ばれていた。

ルター破門（1520年）の４年後に制作されたこの版画は、聖書の「家と土台」のたとえを元にしている。



（fig.8）
エアハルト・シェーン
《賢者の家と愚者の家、マタイ伝７章より》

「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なうものはみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家にうちつけたが、それでも倒れませんでした。」（中略）「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。」（マタイ伝７章24-27節）

「わたしのことば」を聖書の文言とすれば、賢者とは福音主義に立つルター派を、愚者はそれを軽視する教皇の勢力を指していると解釈できる。

木版画の左側には岩上の賢者の家、右側には洪水に流される愚者の家。中央には賢者を攻撃しようする愚者。左下では枢機卿が、教皇勅書を手に破門を警告している。

**「第２章：第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗」[31]（No.4-10）**

**概要**

この章は、ナチスドイツの公式記録写真集“Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）”を中心にして構成する。“Tag der Deutschen Kunst”は、「ドイツ芸術の日」（1937年７月18日）にミュンヘンで行われた３つの式典の記念アルバムで、テクストと100枚のステレオ写真、ステレオ写真用眼鏡（ビュアー）をセットしたものである。「大ドイツ芸術展」、「退廃芸術展」（1937年７月19日開幕）、「記念パレード　ドイツ文化の2000年」（1937年７月18日）の光景が収められている。

「退廃芸術展」は、近代のBildersturm（偶像破壊）の類例として挙げることができる。ナチスドイツは、「非ドイツ的」美術を美術館や画廊など公的な場から撤去・接収し、それらを誹謗中傷することを目的として、退廃芸術展をドイツ各都市で巡回開催した。また多くの美術品を焼却した。

この資料を中心に、退廃芸術展を扱った戦後の資料から、ベルリンやミュンヘンにおける焚書の記録写真の図版を複写拡大したものを、出典を明記して併置した。また、弾圧だけでなく同時代の抵抗運動や戦後の批判的検証と歴史的保存活動を示す資料として、ジゼル・フロイントによる《第一回文化防衛のための国際作家会議》の写真（No.8）や、退廃芸術展の再現展カタログの図版（No.9）、ミシャ・ウルマンがベルリンの焚書の跡地に制作したモニュメント《図書館》の写真（No.7）、そして、2014年の日本におけるアンネの日記破損事件との関連を示す意味で、事件の新聞記事とともに1978年に銀座松坂屋で開催された『アンネの日記展』図録（No.10）も展示した。

**No.4 “Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）”（fig.9）（解説シート）**

『ドイツ芸術の日』は、ナチ党帝国報道カメラマンのハインリヒ・ホフマン撮影の写真と、アルベルト・ブルクハルト・ミュラーによるテキストによって構成された、ミュンヘンにおける「ドイツ芸術の日」の公式記録写真集である。表紙には、美術の象徴パラス・アテナとナチスドイツの国章があしらわれている。

（fig.9）
“Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）”

写真集には、ミュンヘン市内における記念行列と式典、ナチスが推奨する美術作品を集めた「大ドイツ芸術展」と、ナチスが弾劾し、全国の美術館から押収した前衛美術を集めた「退廃芸術展」の光景（fig.10）が100枚のステレオ写真で収められている。本の見返し部分に、二枚続きのステレオ写真と専用の眼鏡（ビュアー）が収納されている。

1937年７月18日、ミュンヘンを訪れたヒトラーはハウス･デア･クンスト（芸術の家）の落成式に出席し、「大ドイツ芸術展」の開催を宣言した。

（fig.10）
“Tag der Deutschen Kunst”より《退廃芸術展の光景》

**No.7 ミシャ・ウルマン（1939年生まれ）《図書館》『美術手帖』（解説シート）**

イスラエル人彫刻家ミシャ･ウルマンは、ナチスが焚書を行った場所、ベルリンのベーベルプラッツに記念碑を制作した。地表に設けられたガラス窓から地下を覗くと、周囲を本棚で囲まれた部屋が見えるが、そこに本は一冊もない。

**No.8《第一回文化防衛のための国際作家会議、メゾン・ド・ラ・ミュチュアリテにて、パリ、1935年》“Gisèle Freund : Photographien（ジゼル・フロイント写真集）”（解説シート）**

ナチスによる焚書から２年後の1935年６月21日、パリにおいてアンドレ・マルローをはじめ各国の作家や知識人が「第一回文化防衛のための国際作家会議」を開催し、ファシズムの攻撃から文化を守るよう訴えた。三千人を超えた出席者の中には、ハインリヒ・マン、ブレヒト、アンナ・ゼーガースら、ナチスに自著を焼却された作家たちもいた。

撮影者のフロイントは、ナチスの迫害を逃れて1933年にフランスへ亡命した女性写真家である。

**No.9《退廃芸術展の第３展示室壁面の再現図》“Degenerate Art : the fate of the avant-garde in Nazi Germany（退廃芸術：ナチスドイツにおける前衛芸術の運命）”〔展覧会カタログ〕（解説シート）**

1991年、アメリカで「退廃芸術展」を再現する展覧会が開催された。この展覧会はアメリカとドイツを巡回した。

**「第３章：占領下の日本で教科書や指導書に下されたさまざまな処分」**[32]

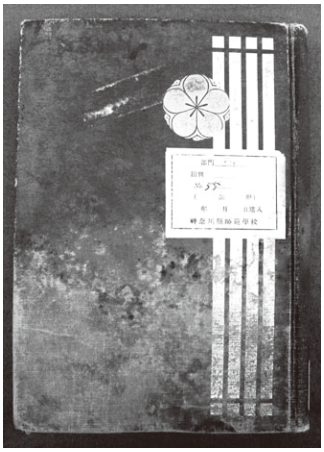
**中村文庫について（No.11-No.18）（解説シート）**

中村文庫は、中村亨（元鎌倉女子大学教授、1914-1993）が、1936年に神奈川県師範学校訓導（現在の教諭）として教職に就いて以来、生涯にわたり収集した美術教育に関する資料のコレクションである。明治から平成初期にかけて発行された美術の教科書1,297点と、美術教育関連文献664点から成る。これらは1988年に本人より横浜美術館に寄贈され、1992年、美術図書室（現美術情報センター）で整理を終えたものである。

今回の展示では、第二次世界大戦終了直後、連合国軍占領下に師範学校の教師たちが自ら焼却処分しようとした指導書（現場教師用の手引き書）や、文部省の通牒に従って「省略削除」等の指示を書き入れた教科書などを紹介する。

**焼却処分を密かに逃れた指導書（解説シート）No.11『尋常小學新定畫帖』、No.12『圖画教授之理論及實際』（fig.11）、No.13『實驗圖畫教授法』**

1945年10月（『日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系』（中村亨編著）によれば８月末）、神奈川県師範学校附属小学校に勤務していた中村は、上司の命により他の職員とともに校庭で図書室の図書を焼却した。その際『尋常小學新定畫帖』、『圖画教授之理論及實際』、『實驗圖畫教授法』を密かに自宅へ持ち帰った。



（fig.11）
『圖画教授之理論及實際』

1945年10月22日、連合国軍最高司令部指令「日本教育制度ニ対スル管理対策」（SCAPIN-178：Administration of the educational system of Japan）が発せられ、「アラユル教育機関ノ関係者ハ左ノ方針ニ基キ取リ調ベラレソノ結果ニ従ヒ夫々留任、退職、復職、任命、再教育又ハ転職セラルベキコト」とし、軍国主義、国家主義とされた教師は罷免処分させられるべきことが明らかになった。教育現場での早急な焼却命令は、こうした指令を背景に、日本側が自ら判断したものと考えられる。

**「中村文庫」における朱入りの教科書について（解説シート）**

1945年９月20日、文部省は「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」を通牒[33]し、「省略削除又ハ取扱上注意スベキ教材ノ基準」を明らかにした。これに基づき、教師は教科書の削除すべき部分を教室で指示し、生徒に墨で塗りつぶさせた。これがいわゆる「墨塗り教科書」である。

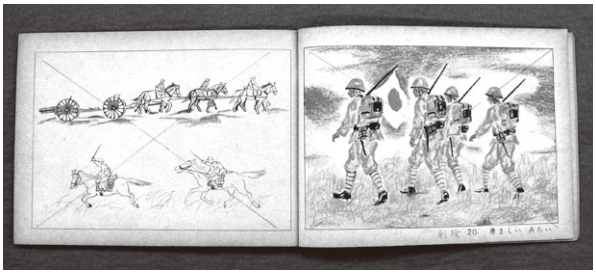
展示資料は、中村が後の研究を考慮し、本来墨で塗りつぶすべき部分に朱書きと朱線を入れるにとどめ「原画を知ることができるよう」にしたものである。

**No.14《20. 勇ましい 兵たい》『エノホン 四』（fig.12）**

国民学校初等科（小学校）用教科書、「削除」の朱入り。

**No.15「20. 勇ましい 兵たい 思想的表現 一時限」『エノホン 四 教師用』**

資料No.14《20. 勇ましい 兵たい》の指導要領。



(fig.12)
『エノホン四』《20.勇ましい 兵たい》

**No.16《８. 防空演習》『初等科圖畫 二 女子用』**

国民学校初等科（小学校）用教科書、「削除」の朱入り。

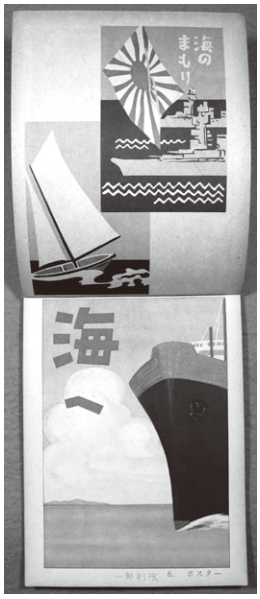
**No.17《28. 隣り組》『初等科圖畫 二 男子用』**

国民学校初等科（小学校）用教科書、「取扱注意」の朱入り。

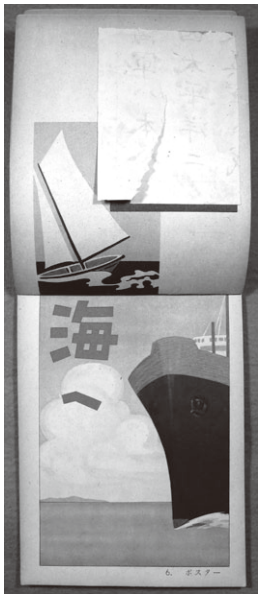
**No.18《６. ポスター（海のまもり）》『初等科圖畫 三 男子用』**

国民学校初等科（小学校）用教科書、「一部削除」の朱入り（fig.13）。

削除する方法としては墨を塗る方法がよく知られているが、ページとページを糊で張り合わせる方法や、別の紙を上から貼り付ける方法もある（fig.14）。本来は図や文を見えなくすることが目的であるため、削除該当箇所に朱線を入れただけの教科書は貴重である。




(fig.13)
『初等科圖畫 三 男子用』
《6. ポスター（海のまもり）》朱入り




(fig.14)
『初等科圖畫 三 男子用』
《6. ポスター（海のまもり）》上から紙を貼り、絵を隠した例

**「第４章：戦後から現代の日本における書物と文化財の毀損」**[34]

**概要**

日本のグラビア雑誌『アサヒグラフ』より、金閣寺焼亡の記事、悪書追放運動の記事を展示した。占領下から占領後にかけての書物、文化財のおかれた状況を伝える生々しい資料である。これらの資料には解説を付さず、キャプションのみ掲出した。

**No.20「鹿苑寺金閣炎上　焼亡つづく國宝文化財」『アサヒグラフ』**

日本における有名な文化財焼失事件として、1949年１月26日に起きた法隆寺金堂壁画焼失が挙げられる。

戦時中から終戦直後にかけて、文化財の保護・保存は疎かとなっていた[35]。特に1949年から1950年にかけては、国宝の火災が相次ぎ、「文化財保護法」（1950年５月30日）が制定される契機となった。

記事の中では、金閣寺のほか1949年から1950年にかけて失火や放火によって焼損した文化財として、法隆寺金堂、長楽寺、諏訪神社、松山城筒井門、松前城などが取り上げられている。

**No.21　特集記事「閉出された家庭の悪書」『アサヒグラフ』**

1945年９月10日、連合国軍最高司令部指令により「言論およびプレスの自由に関する覚書」（SCAPIN-16：Freedom of press and speech）が発せられ出版の自由が認められると、文芸や言論に関する本の他､「カストリ雑誌[36]」と呼ばれる大衆娯楽雑誌が盛んに出版されるようになった。

写真からは「カストリ雑誌」とされた『夫婦生活』（1949年創刊[37]）、『モダン夫婦読本』（創刊年不明）の表紙がみえる。また文中からは『夫婦生活』、『猟奇』（1946年創刊[38]）『奇譚』（創刊年不明[39]）などの誌名を確認できる。『猟奇』２号（1946年12月発行）については、戦後初の猥褻文書として警察に摘発された[40]。

## ３　展示論

「焚書展」では、平成25年度までのケース内展示にはなかった新たな展示方法を企画、実施した。以下に詳細を述べる。

### １）資料の展示について

机上の実物シミュレーションに先立ち、今回初めてケースの展示面と資料の外寸を計測して縮尺1/5の模型を作り、いくつかの展示パターンを試作しながら章の輪郭を決めていった。ケース内への展示の際は、資料は図版のページを開いた状態で、章ごとにまとめて展示した。

また、資料はひとつひとつ形状・形態が異なるため、それに合わせて展示方法を考案した。例えば“Tag der Deutschen Kunst”（fig.9、No.4）は、表紙に描かれたナチスドイツの国章が見えるようにするため、資料を透明のアクリル製書見台に載せ、書見台の下にミラーアクリルを敷いた。また、当該資料の特徴として、立体写真100枚と専用の立体眼鏡（ビュアー）が付属している。資料裏の見返し部分の板紙に作られたポケットに束になって収められていた写真（全100枚のうちの77枚）を､「頽廃芸術展」､「大ドイツ芸術展」､「記念パレード」の写真に分けて配置した。①「退廃芸術展」の写真は立体眼鏡に装着し､ケースの上から眼鏡を覗けるように展示した。②「大ドイツ芸術展」および「パレード」の写真は、ミラーアクリルの左右１列に５、６枚ずつ並べた（後期は１列）。残りの写真は束にした状態で重ねて配置した。なお資料保護のため、１週間おきに開くページを変更し、並べる写真を入れ替えた。

### ２）資料の支持方法について

新たな物品の購入は行わず、館内にあるもののみを工夫して用いた。ページを開くことによる資料の浮き上がりについては、ガラス製の卦算を使用するか、あるいは幅2.5cmのポリエステルテープを用いて、資料の両端または片端を押さえた。左右のページに段差が生じる資料については、美術品梱包に用いる薄葉紙を折り畳んだものを緩衝剤として敷いた。以下は資料の形状に応じて特別に手作りした。

### A　大型の書見台

大型の洋書“Historische Kronyck”については、重量に耐える書見台が無かったため手作りした。およそ95°の角度で資料を開くことができる書見台が必要であったため、美術品梱包用の複両面段ボールで骨組みを作成し、資料と接する面を資料保存用品の中性ボードで覆った書見台を制作した。さらに毛氈を縫合したカバーで覆って完成させた（fig.15）。

（fig.15）
“Historische Kronyck”は手製書見台に置き、キャプション、解説を設置した。

### B　眼鏡台（fig.16）

“Tag der Deutschen Kunst”に付属しているステレオ写真用眼鏡（ビュアー）を展示ケースの上から覗くことができるように、テーブル状の小台を製作した。ケースの天板近くまでの高さがある台が必要であったため、木製展示台（20cm×20cm×5cm）の側面を底辺として配置した。眼鏡を置く面には、天板代わりに10.5cm×22.5cm×0.7cmのスチレンボードの板を貼った。そのうえで、全面に毛氈を貼ってカバーをした。高さのある台なので、ポリエステルテープにピンを刺してケースの展示面に固定して地震等による転倒を防止した。

（fig.16）
眼鏡台

## 3）キャプション（図版情報・書誌情報）について

キャプションには書誌情報のほか、今回クローズアップしている図版こそが主役であるので、通常蔵書展示では図書資料には書誌情報を記載したキャプションを付していたが、今回は各資料の特定の図版や記事に焦点を当てた展示であるため、書誌情報に加えて図版情報を可能な限り付すこととした。

レイアウトに際しては一枚のキャプションの上部に図版情報、その下に書誌情報を配置した。一般的な文書作成ソフトウェア（マイクロソフト社のWord）で製作し、印刷にはコピー用紙を用いた。

図版情報の項目については、図版名、作家名と生没年、技法、テクストを表記した。洋書の図版名は和訳し、外国人作家名はカタカナ表記にした。作家の生没年、技法は可能な限り調べた。いずれも図書館では通常行わない作業である。

書誌情報については、今回から新たに請求記号と資料種別（図書、展覧会カタログ、雑誌）に合わせた項目を記載し、「項目名」についてもその都度記した。補足する場合には〔　〕内に標記した。また、洋書名には和訳を併記した。通常図書館では洋書名や著者名を翻訳することはないが、展示であれば、たとえ一部分であれ和訳を加えることで、普段外国語を読まない人々も洋書にアクセスすることが可能となるため、展示解説上の利便を考慮した。その他、請求記号は、展示後に資料を探しやすくするための工夫である。このように美術展とは異なる「図書室ならではの展示」を心がけた。資料種別毎の記載項目の詳細は以下のとおりである。

**A　図書**　書名（必要に応じて和訳）、著者名、出版社、出版年、ページ、寄贈者名、文庫名、請求記号

**B　展覧会カタログ**　書名（必要に応じて和訳）、展覧会カタログであることを補記、著者名、出版社、出版年、開催館、会期、出版年、ページ、寄贈者名、請求記号

**C　雑誌**　書名、巻号、出版社、出版年月日、ページ、寄贈者名

### 4）導入パネル

タイトルを大書きし、チラシ序文に準じた内容の導入パネルを設置した。

### 5）資料解題（解説シート）

上記２　４）のように主要な図版や、資料、資料群には500字程度の解説を付した。

設置場所は、個別の図版に対する解説の場合には、キャプションに近接させ（fig.15）、資料群の解説の場合は順路に沿って当該資料群の冒頭に置いた。文字サイズはガラスケース上からの見やすさを考慮し14ptとした。

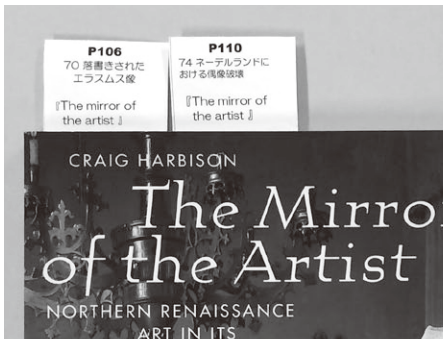
### 6）展示替え

より多くの資料を展示するため、９月30日を境に約半数の資料の入れ替えを行い、全期を通じて21点を出品した。どの資料がいつ出ているかは、「ケース展示資料目録」（表４ P.50参照）の中で記号により表示した。

前期展示が終わった後も、貴重書等を除く一部の資料は関連資料コーナー（後述）に追加することにより、手に取ってご覧いただけるようにした。

### 7）「焚書展」関連資料コーナーの設置

展示資料の鑑賞だけでなく、この展示を契機として将来的な資料利用を促進することができるように、展示ケース付近の閲覧席上に関連資料コーナーを設置した。関連資料コーナーでは、主に展示ケースでは紹介しきれない事例や、展示ケース内の資料を補足説明する資料を配架した（表６ P.54参照）。資料には資料名（雑誌の場合は巻号も表記）、ページ数、解題を記載した付箋（fig.17）を挟んだ。この他、会期中に報道された「書物と文化財の毀損」に関する新聞記事をファイリングし、「スクラップファイル（新聞記事）「焚書」―禁じられた書物と文化財―参考資料」として、関連資料コーナーに設置した。



（fig.17）
資料名、ページ数、解題を記載した付箋

なお、本資料コーナーとは別に、今期トリエンナーレ出品作家や過去のトリエンナーレに関する資料を、開架室専用書架の「企画展資料コーナー」に配架した[41]。

### 8）資料目録の作成と配布

今回初めて出品資料と関連資料の目録を作成した。「ケース展示資料目録」（表４ P.50参照）と「関連資料コーナー資料目録」（表５ P.52参照）を合わせた「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示 「焚書」―禁じられた書物と文化財―出品目録」を発行した。

章立て順に資料を並べた２種類の目録をホチキスで綴じ、表紙と目次を付け、B4サイズ裏表10ページの出品目録とした。

「ケース展示資料目録」では作家名、テクストともにキャプションにはない原文も併記し、資料サイズ（縦）をmm単位で計測し、より詳細な情報を得られるようにした。

「関連資料コーナー資料目録」は、展示の章立てにはない、「序章」、「ヨーロッパとアジアにおける文化財の毀損」の章を新たに追加した。このリストは展示期間中、会場で無料配布された。

## 4　広報・広聴活動

### 1）広報

下記の広報媒体にて「焚書展」の周知を図った。

#### A　チラシ

展示替えに合わせ、前期、後期（fig.18, 19）の２種類のチラシを作成した。前期は片面印刷であったが、後期は両面印刷とした。配布先は、トリエンナーレ展覧会場である美術館内と新港ピア、当センター内、横浜市中央図書館とした。

(fig.18)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」チラシ（後期／表）

(fig.19)
資料展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」チラシ（後期／裏）

#### B　市政記者発表

2014年８月22日、今回初めて以下のタイトルで市政記者発表を行った[42]。

「ヨコハマトリエンナーレ 2014 関連特別展示／横浜美術館 美術情報センターにて開催中／「焚書」―禁じられた書物と文化財―2014年８月１日㈮―11月30日㈰」

#### C　ウェブサイト

当館ウェブサイトの「新着情報」欄で資料展示を告知した。内容は、展示タイトル、概要、

期間、時間、場所、休室日、一部の展示資料の書誌情報と写真を掲載した。

D　メールマガジン

当館メールマガジンにて告知を行った。

E　SNS

当館のTwitter公式アカウントにより告知を行った。Twitterによる『東京新聞』ウェブ版記事からの引用も79件（2015年３月６日現在）見られた。

### ２）取材

2014年９月７日、新聞記者の現場取材を受け、下記の通り掲載された。

小沢慧一「焚書：西区で資料展　言論統制歴史学ぶ」、『東京新聞』、2014年９月８日朝刊、18面（地域の情報 横浜）

### ３）アンケート

今回の初の試みとして、アンケート（後述）を実施した。

## 第４章　「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」展のアンケート分析

平成27年８月28日から11月30日まで、閲覧室にある木製記載台にアンケート用紙と鉛筆、受箱を設置し、展示鑑賞者に任意に記入していただいた。前期８人、後期９人、合計17人から回答をいただいた。設問と回答は（表７ P.55参照）のとおり。

この展示を知ったきっかけについての設問では、ホームページ（電子媒体）を見た人が１人であったのに対し、チラシ・新聞記事（紙媒体）を見た人が６人であった。チラシの配布場所は今回主に３カ所（横浜市中央図書館、横浜美術館、新港ピア）だったが、配布場所を増やす必要があると思われる。また、東京新聞の取材を受け記事に取り上げていただいたことで効果があり、その新聞記事を見たとする回答者が２人あった。こうした広報媒体を通じて、もしくは知人からのすすめと回答した人は合わせて15人であった。アンケートの回答者のうち４分の３は本展示のために来室したと考えられる。また、展示を見た動機についての設問では、展示タイトルやテーマといった今回のケース内展示の企画そのものに興味を持っていた人が複数回答で22人と、この設問での全体の７割を占めた。ヨコハマトリエンナーレ2014に関連していることを理由に挙げた人は５人、ブラッドベリの小説を読んだという人は２人であった。本展示の広報に当たっては「ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示」と銘打ったが、今回のアンケートで見る限りで、トリエンナーレという接点で興味を持つ人よりも、展示の企画自体に惹かれた人が多かったようである。

展示の構成についての設問では、資料の分量、内容、資料と資料のつながり、配置、タイトルと資料の関係についてそれぞれ問いを立てた。概ね「良い」という反応であった。その中のひとつにあった資料の分量が「少ない。もっと見たかった」という意見は、この展示に強く興味を持っていただけたことをうかがわせる。また、資料相互のつながりについては「共通のものを知ることができた」、タイトルと資料の関係性についての問いでは「いろいろな例が挙げられて面白い」「よく関連付けられていた」「関係性が分かりやすい」などの意見が中心であり、文化財の毀損について様々な資料を集め紹介するという展示の趣旨を概ね理解していただけたと考えられる。

キャプションや説明文の内容、長さ、表示を問う設問では、おおむね「良い」という意見だった。さらに詳しい解説を望む声も上がっていた。

この展示の中で面白かったものを問う設問で、「情報媒体としての図書」の視点に立つ回答として、退廃芸術展や悪書追放運動等をこの展示で初めて知ったという書き込みが複数あった。「物としての図書」に注目した回答としては、ナチスドイツの公式記録写真集『Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）』のステレオ写真についての反響が大きかった。「中村文庫」の戦後焼却処分を免れた指導書も挙げられていた。

記述式の設問の回答を見てみると、「前期、後期に分けるのはもったいない」、「出品目録に説明文も記載があればよい」、「パンフレットがあると良い」など、まとまった規模の展示を望む声や、図版や解説を含むカタログ的な配布物への希望が寄せられた。最も多かったのは、展示テーマとなった「書物や文化財の毀損」についての感想で、来館者の考えが自分の言葉で述べられていた。これらの感想を見ても、この展示が「焚書」をはじめとする文化財毀損の歴史や、文化や芸術をめぐる今日の状況との連関について、来館者に関心を持って考えていただく機会になったと言えるだろう。

## 第５章　他館の資料展示の事例

平成20～26年度の７年間に亘り試行と考察を重ね、当センターにおける資料展示は変化してきた。平成26年度の「焚書展」では、積極的に資料の内容に踏み込んだ解説を交えた構成と展示方法（解説シートの設置）という新たな試みを行い、アンケートで好評を得られた。しかし、「焚書展」の成果について客観的に振り返り、合わせてよりよい資料展示についての参考とするため、他館の事例を実地調査することにした。平成26年10月から12月にかけて美術図書館、公立図書館、公文書館、文学館などで開催された資料展示（所蔵資料の展示）15件の実地調査を行った（表８ P.56参照）。展示の形式としては①資料コーナー、②ケース内展示、③額装展示、④パネル展示の４つの形式が見られ、単独あるいは複数の形式を組み合わせる場合があった。

ここでは特に過去のネガティブな歴史遺産を展示テーマとしている点が当センターの「焚書展」に共通する例として、神奈川県立図書館の展示「戦時文庫」（以下「戦時文庫展」）を取り上げ、展示の構成、配慮されている点について検証する。

（表８、No.8）

タイトル：開館60周年記念展示　コレクション紹介シリーズ第３弾「戦時文庫」

会　　場：神奈川県立図書館　本館１階展示コーナー

会　　期：平成26年８月15日㈮～11月12日㈬

神奈川県立図書館には「戦時文庫」と名付けられた「特別コレクション」がある。昭和８年に改正された「図書館令」により全国の公立図書館に＜貸出文庫＞の設置が義務付けられ、これを受けて神奈川県では、昭和15年に県中央館の代用館として金沢文庫が＜貸出文庫＞を行うことになった。終戦後＜貸出文庫＞はGHQに接収されたり、焼失するなどしてその多くが失われたが、昭和44年、旧＜貸出文庫＞所収の図書資料1,570冊がまとまって金沢文庫の須弥壇台座の下から発見された。これらは昭和54年に神奈川県立図書館に移管され「戦時文庫」として保管されるようになった。資料のジャンルには戦記、戦史、軍事事情、伝記、海外事情、軍事読物、小説、紙芝居などがある[43]。今回調査した「戦時文庫展」は閲覧室とは別に独立

した専用の展示室を使用し、コの字型に連なる３つの壁面に沿って４台の覗き型ケースが配置され、その中に49点の図書資料が置かれていた。また、ケース背後と両脇の壁、通路を挟んだその対面の壁にはA2大のパネル23枚が掲出されていた。「戦時文庫展」において注目された主な工夫は以下のとおりである。

## １　展示方法での工夫

### １）パネル

大別すれば、①タイトル（「導入文」・「結びの文」含む）、②「戦時文庫」の解説、③各章・個別資料の解説（一部図版含む）、④図表類（年表、写真含む）の４種がある。④の図表類はテキスト中心の②を視覚的に補っており、特に旧＜貸出文庫＞の戦後の行方を図示したパネルはこれらの図書資料が時代の変化により亡失の運命にあったことを雄弁に物語る。「年表にみる戦時文庫」と題されたパネルには「戦況・世の中の動き」や「流行語」も項目に挙げられ、来館者に「戦時文庫」の時代背景を想像させる。①の「結びの文」を出口に設置することで、来館者は展示内容を振り返りつつ展示趣旨をも理解できる。③は展示資料と共に見られるように資料上方（背後）の壁面に掲出されていた。

### ２）各章のタイトル

全７章構成で、４つのケース（①～④）にはそれぞれ、①「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」、②「実践のための知恵」および「女子の心得と教養」、③「伝記」および「ノンフィクション」、④「ベストセラー」および「写真・絵画・漫画」というタイトルが付されていた。＜貸出文庫＞の時代からこのように分けられていたのではなく、司書が展示のために資料の内容に基づいてカテゴライズしたものと考えられる。①は当時の国家的なスローガン、②は当時の日本人に求められた心構えや知識を普及させる出版ジャンルがタイトルとされ、①、②ともにその時代の特徴的な出版傾向を表している。③、④は今日も存在し常用されているジャンル名をタイトルとしており、それらが過去（「戦時文庫」が＜貸出文庫＞として存在していた時代）と現在を繋ぎ、両者を対比して考えさせる仕掛けともなっている。

### ３）資料リスト

展示資料リストには、「戦時文庫展」に関する基本情報（タイトル、会場、会期、展示資料の簡単な概要）、各章のタイトル、全資料の書誌情報、請求記号、凡例、主要参考文献が記載されている。このほか当センターのリストにはない事項として、ケースの番号、一部の章についての解説、資料番号、電子版『戦時文庫目録』（ウェブサイト）のアドレスおよび問い合わせ先が記載されている。展示の記録としてだけでなく、紹介したコレクションの将来的な利用促進の意味でも有効である。

## ２　考察を促す解説文

この展示を説得力のあるものにしている大きな要因は、解説パネルおよび結びのパネルに記載された言葉が見る者の考察を促進することにあるといえる。とりわけ次のパネルの解説文は印象深い。

**・「戦時文庫の成り立ち⑴文部省推薦図書と思想統制」より**

「思想統制が厳しい反面、この時代には読書意欲が飛躍的に向上した時代であるとも言われています」

**・「コレクション紹介⑼児童書」より**

「貸出文庫開始当初は男女青少年層を主たる読者対象とし、産業・政治・経済部門の図書を中心とする方針でしたが、小学校児童の利用が予想外に多く、産業図書の購入費を児童図書へ代えたという記録が残っています」

・「おわりに」より

「当館の戦時文庫は時代の特徴を反映しています。１、戦時文庫の多くは日本の戦争期（昭和16年～昭和19年）に出版されているため、当時の緊迫した社会状況を映し出していること。」

「図書館の使命の一つに多様な価値観、意見を異にする情報を収集し広く社会や後世に伝えていくというものがあります。戦時文庫コレクションが図書館の社会的使命を果たし、当時の複雑な時代背景を知る鍵になれば幸いです。」

これらの解説パネル、結びのパネルは一貫して客観的事実だけを述べている。にもかかわらず、思想統制された戦時下にあってなお、熱心に書物を読む人々と、そうした人々の要望に応えんと努力する図書館職員たちの姿が現実感を伴って浮かび上がってくる。また、年表やその他のパネル、実物資料から、彼らを取り巻く当時の状況がいかに切迫していたかも伝わってくる。展示されていた資料は物資の逼迫した時代の出版物であり、紙質も印刷も良いとは言えず、ほころびや変色など経年による劣化が見られるが、当時大勢の人々に読まれ、また戦火をくぐり抜けてきたとは思われないほど良好な状態を保持していた。その保存状態を見てもこれらの図書が当時の人々にいかに大切に扱われてきたのかが分かる。このようにパネルと展示資料が互いに作用し合い、この展示を見る者が、図書を手に取った当時の人々の姿をまざまざと思い浮かべられるような展示であった。これが図書の力を引き出す展示ということであろうか。結びのパネルの「図書館の使命」に触れている一文では、これを企画した司書の思いが伝わってくる。

## ３ 「戦時文庫展」と「焚書展」の比較と考察

### １）共通点

共通点は三つある。ひとつは、どちらの資料展示ともネガティブな歴史的遺産を展示のテーマとした点である。このような性格の展示には困難を伴う。それは、意図するとしないとに関わらず、展示コンセプトや資料の見せ方によっては、図書館が展示テーマや資料自体に一面的なレッテルを貼ったように見えたり、偏った内容の展示と受け取られたりする恐れがあるからである。そしてその場合、図書館の基本的なあり方から外れることにもなる。例えば「戦時文庫」を展示テーマとする場合、戦時下のプロパガンダとして、言論統制の道具の物証としての否定的な側面ばかりが強調されて伝わることも考えられる。また逆に、当時の人々の戦意を高揚させた精神的支柱として過度に美化されることも考えられる。そうした危険を回避するために、そもそも最初からこの種の資料の展示を企画しないという選択肢もあるだろう。しかし、「戦時文庫展」では否定でも賛美でもなく、あくまで中立の立場で、「多様な価値観を後世に伝える」という図書館の本分を前面に出し、一貫した姿勢のもとに展示を構成することで歴史資料と積極的に向き合っている。一面的な価値判断に偏らない図書館ならではの展示[44]であると言える。司書が、館としての立場や展示コンセプトについて十分に議論を重ねて企画された資料展示であることが分かる。振り返って「焚書展」では、展示資料から焚書や文化財毀損の歴史事例を知っていただき、焚書等を良い悪いで捉えるのではなく“誰が何の為に焚書等を

行ったのか”という視点で見る人に考えてもらうことを主眼に置いている。ネガティブな歴史的遺産を客観的に正確な情報とともに展示することで、資料から分かる歴史上の多様な価値観を伝えようとする姿勢において「戦時文庫展」も「焚書展」も図書館の基本的な立場に基づいた展示と言える。

もうひとつの共通点は、当センターの用語で言えば所蔵資料紹介を兼ねたテーマ展示であり、「情報としての書物」にスポットを当てながら「物（実体）としての書物」の二つの視点を兼ね備えた展示となっているところである。

三つ目の共通点は、展示の構成する補助具に①パネル、②章のタイトルの設定、③出品リストを用いていることである。いずれも司書が所蔵資料についての丹念な調査・研究に基づいてコンセプトを考案し、章タイトルと解説パネルの設置を積極的に行っている。それによって展示のテーマを分かりやすく伝え、展示資料についての理解を助けている。

### 2）相違点

「戦時文庫展」と「焚書展」との相違点は、“解説する対象”が挙げられる。「戦時文庫展」では「戦時文庫」という特殊コレクションの存在を知らしめることを目的としているため、主にこの文庫が神奈川県立図書館に保管されるに至った経緯や文庫の構成ジャンルといった“資料のまとまり”について詳細に解説している。これに対して「焚書展」では、様々な「焚書」や文化財毀損の事例を、多種多様な資料に掲載された図版や記事で示しているため、個々の資料やその部分である掲載図版・記事自体を、解説を交えながらクローズアップし、それらの内容を連関させることで展示を構成している。このように展示コンセプト、資料の示し方に由来した違いがある。

### 3）資料展示の課題についての考察

当センターの旧来の展示（平成25年度までの「展覧会補完展示」や「蔵書紹介展示」）では、書物を展示することで手に取って読むことができなくなること（本の内容を知ることができないこと）が課題であったが、「焚書展」や「戦時文庫展」では、解説パネルや解説シートを用いて、キャプションだけでは伝えることのできない資料の内容を展示の文脈に沿って簡潔に示した。それまで、図書資料について司書が解説を書くことには筆者はいささか抵抗があった。それは、利用者が自由に理解し解釈するべき内容（情報）に、司書が深く踏み込んで解説することで、解釈に一定の方向性を与えたり、意味を限定して伝えたりする恐れがあると考えられたからである。しかし、図書館の中立的な立場を念頭においた展示コンセプトに基づいて、司書が調査研究を行いその解説を書くことは可能であり、アンケートの結果に照らしてみても、当センターの「焚書展」で実施した資料の内容に踏み込んだ解説を交えた展示構成は、利用者が積極的に資料内容と向き合う契機となったことで、有効であったという確信を持つことができた。

## おわりに

最後に書物のケース内展示の可能性について所見を述べたい。これまで見てきたように、過去６年間の当センターでの資料展示の実践と考察、平成26年度新たな要素を加えて企画実施した「焚書展」で得られた成果やアンケートの反応、神奈川県立図書館をはじめとする他館の資料展示の実地調査で得た知見から、

メディア（媒体）としての書物と物としての書物のふたつの観点を合わせもつ展示の方法論を掴めたように思われる。展覧会との関連性を持たせたテーマにせよ、所蔵資料そのものを出発点としたテーマにせよ、いずれにおいても司書が主体的にテーマを設定し、調査研究を踏まえて資料の内容を客観的かつ正確に伝える解説を交えながら展示を構成することが重要であり、それが来館者の期待にも沿うものであると言える。今回の「焚書展」ではある特定のページや一枚の図版が主役であり、そこにたどりつくまでの考察のプロセスが展示の文脈を形作っていった。これを名付けて「調査研究型展示」と言えるだろう。また、予算上その他の問題もあり未着手ではあるが、将来的には展示リストに図や解説を加える形で拡充し、パンフレットなどの形式で小規模ながらも美術展のカタログに相当するものを作成することも有効と考えられる。これまでケース内展示は予算化されていない事業であったが、展示ケースの分かりやすい案内表示の作成や、たとえ僅かであっても展示用備品の購入と、企画段階で展示対象となりうる資料の新規購入等が行えれば、資料展示事業そのものの向上だけでなく、コレクションの拡充を来館者の目に見える形で行うこともできるだろう。

今回の展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」では、アンケートという形で来館者の反応をつぶさに知ることができた。来館者がこの展示に少なからず心動かされ、熱心に見て下さったことが分かった。また、この展示の企画意図が確かに来館者に伝わったという実感を得られた。このことは、我々司書にとって大きな財産である。資料展示は利用者と資料を繋ぐ役割を担うだけでなく、来館者と司書が資料を介して対話することができる仕掛けでもあるように感じる。当センターの全ての利用者に感謝しつつ、今後もより良い資料展示とは何かを模索し、所蔵資料の調査研究を重ね、積極的に資料展示を企画していきたい。そのような地道な努力を積み重ねることにより、利用者に信頼される図書室となることができる。

## ［註］

［1］ 当センターの配置人数は、職員（司書）２名、常勤のアルバイト（司書）１名、非常勤のアルバイト（カウンタースタッフ）４名、計７名となっている（平成26年度）。

［2］ 蔵書目録は、当センター内に設置している蔵書検索パソコン（OPAC）のほか、当館ホームページで公開している（http://yma.opac.jp/freefind.cgi）。また、美術図書館９館11室の蔵書が検索できる「美術図書館横断検索（http://alc.opac.jp）」を公開している、美術図書館連絡会（ALC: Art Libraries' Consortium）に参加している。

［3］ 開架資料は、芸術分野の和書、参考図書（和洋）、国内外の雑誌（最新号および刊行年が近いもの）、当館展覧会カタログ・パンフレット・年報紀要、現在開催中の他館の展覧会カタログがある。

［4］ 閉架資料は、洋書、参考図書・芸術分野以外の和書、国内外の展覧会カタログ、貴重書、美術館等刊行物、所蔵品目録、超大型本、特殊コレクション、国内外の雑誌のバックナンバー、エフェメラ資料、マイクロ資料、映像資料等がある。

［5］ レファレンス対応では、主に所蔵資料に関する問い合わせ、蔵書検索（OPAC）等の機器類の使用方法に関する質問に回答している。来館の利用者とカウンターで直接やりとりする場合と、電話対応の二種類がある。また、利用者からのレファレンスの助けとするため、蔵書検索端末２台、インターネット検索端末２台の計４台を設置している。インターネット検索端末では、上記のウェブサイトのほか、国立国会図書館を始め公立図書館の蔵書検索、アートイベント情報検索が可能なウェブサイト（ヨコハマアートナビほか）等を閲覧できるようにリンク集を作成している。

［6］ 複写サービスは、著作権法第31条の範囲内で行っている。

［7］ 当センターの利用方法、施設の機能、所蔵資料紹介、利用者サービスの紹介を目的として、年に１～３回実施している。司書のガイドにより、閲覧室・書庫の資料や検索端末（OPAC）、マイクロリーダーなどの設備を見学していただくほか、貴重書、洋書、洋雑誌等の中から、特徴ある資料を選び、解説を交えて、参加者に直接現物を手に取っ

てご覧いただいている。

[8] 横浜美術館が掲げる目標の一つに「市民ボランティアの育成」がある。当センターでは参加者（市民）が当センターの資料を扱う業務の一部を体験することで、内側から当センターの活動や機能を理解していただくことに主眼を置いて企画している。平成26年度は、長期ボランティア３種（①エフェメラ資料のファイリング、②作家ファイルリスト作成、③資料の装備・補修）３人、１日ボランティア（資料保管袋作成、ファイリング、配列確認）７人が登録され、述べ日数は46日を予定している。

[9] 用いるガラスケースは当センター閲覧室の中程に２台設置されており、形状は４側面と天板がガラス製の覗き型で、サイズは幅182cm、奥行き99.3cm、全高92.3cm、展示面の床上高さ60cm、展示面からケース天板までの高さ32.3cmである。木製で、閲覧室の什器の色調に合わせた濃いグレーの塗装仕上げとなっている。

[10] 小林清親『東京名所図』、学習研究社、1975年

[11] 第２回から、「工夫を凝らした美術展カタログ」というタイトルを併用した。

[12] トリエンナーレの会期終了日は2014年11月３日㈪。

[13] R. Bradbury, Fahrenheit 451（London : Grafton Books, 1976 ）, p.65. 著者訳

[14] 横浜トリエンナーレ組織委員会事務局2013年５月21日発表、『ヨコハマトリエンナーレ 2014 第２回 記者会見資料 展覧会タイトルとコンセプト、会期発表』

[15] [一度読んだ本を思い出すことができる人々：筆者註]

[16] 前掲書『ヨコハマトリエンナーレ 2014 第２回 記者会見資料　展覧会タイトルとコンセプト、会期発表』より

[17] 前掲書

[18] 前掲書

[19]「図書館の自由に関する宣言」第２の１項

[20]「図書館の自由に関する宣言」前文４項

[21] 1979年の日本図書館協会総会では同宣言改訂が採択された。

[22] 2001年８月10日から同月26日にかけて、船橋市西図書館の司書が、「新しい歴史教科書をつくる会」やその賛同者らの著書、合計107冊（会や賛同者以外の著書も含まれる）を、同館資料除籍基準に該当しないにもかかわらず廃棄した事件。最高裁判所による判決は次の通りであった「公立図書館の図書館職員である公務員が、図書の廃棄について、基本的な職務上の義務に反し、著作者又は著作物に対する独断的な評価や個人的な好みによって不公正な取扱いをしたときは、当該図書の著作者の人格的利益を損害するものとして国家賠償法上違反となる」。（最高裁判所判例集より　事件番号：平成16年（受）930、事件名：損害賠償請求事件、裁判年月日：平成17年７月14日）

[23] 米国図書館協会（ALA：American Library Association）による、Intellectual Freedom and Censorship Q&A（知的自由と検閲Q&A）より、米国大使館 広報・文化交流部レファレンス資料室訳

[24] 白川静『字通』、平凡社、1996年、p1394

[25]『日本大百科全書』７巻、小学館、1986年、p245

[26] 図書館の分類法NDC9（日本十進分類法新訂９版）によると、「焚書」は「禁書」とともに分類記号023.8に収められる。この023.8の分類項目には、以下のように出版の自由と規制に関する主題が広範に含まれている。

１）禁止本（禁書、発禁本、発売禁止本、Prohibited books）、２）検閲（Censorship）、３）出版の自由、４）出版論理、３）秘密出版（秘密出版物、Underground literature、Underground press publications）、４）表現の自由（Freedom of expression）、５）焚書（Book burning）、６）ポルノグラフィー（ポルノ、Pornography）

（「Web NDL Authorities 国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス」よりhttp://id.ndl.go.jp/auth/ndla/）

焚書は、検閲や発行禁止などの規制の手段のひとつであって、出版活動や既存の書物を規制あるいは弾圧する様々な「手段」が他にもあることが理解される。

[27] 章ごとの註で参考文献を記す。

[28] **第１章主要参考文献**

新改約聖書刊行会訳『聖書』、日本聖書刊行会、1986年

R.W.スクリブナー、C.スコット・ディクソン著、森田安一訳『ドイツ宗教改革』、岩波書店、2009年

Germanisches Nationalmuseum Nürnberg “Martin Luther und die Reformation in Deutschland : Ausstellung zum 500. Geburtstag Martin Luthers”（Insel, 1983）〔展覧会カタログ〕

徳善義和『マルティン・ルター：ことばに生きた改革者』、岩波書店、2012年

森田安一『木版画を読む：占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』、山川出版社、2013年

田辺幹之助、佐藤直樹編『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』、国立西洋美術館、1995年〔展覧会カタログ〕

森田安一『ルターの首引き猫：木版画で読む宗教改革』、山川出版社、1993年

藤代幸一『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥：ザックス、デューラーと歩く宗教改革』、八坂書房、2006年

［29］表記は、神戸市立博物館による和訳に倣って「史的年代記」とした。菅野陽は、『大和文華』79号　菅野陽「蘭書『可鹿涅乙吉』と石川大浪の「ヒポクラテス画像」ほか」（1988年２月、p.32）において、“Historische Kronyck”は江戸時代に「歴史的年代記」「西洋全史　和蘭ゴッドフリイド撰」と訳されており、「西史」「西洋全史」も同じ書物を指すのではないかと述べている。

［30］1997年に版画家の菅野陽（1919-1995）氏より当センターに寄贈された。ページは２段組み（double column）となっており、9-10ページには、レーワルデン公立図書館のものとみられる蔵書印が捺されている（蔵書印は部分的に文字が欠落ており、「OPENB. LEE□□□□L, LEEUWARDEN」とある。欠落部分は、「LEE SZAA L」であると推測される）。レーワルデンは、ライデンから約145km北東の都市である。

［31］**第２章主要参考文献**

“Entartete Kunst : Bildersturm vor 25 Jahren”（München : Haus der kunst, 1962）〔展覧会カタログ〕

リン・H・ニコラス著/高橋早苗訳『ヨーロッパの略奪：ナチス・ドイツ占領下における美術品の運命』、白水社、2002年

平井正「ドイツ頽廃芸術展」『季刊みづゑ』962号（1992年３月）、pp.36-49

［32］**第３章主要参考文献**

横浜美術館『中村文庫目録』、横浜美術館、1992年

中村亨『日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系』、日本文教出版、1979年

文部省大臣官房文書課編『終戦教育事務處理提要 第１輯』、文部大臣官房文書課、1945年

文部省『学制百二十年史』、ぎょうせい、1992年

片山清一編『資料・教育基本法』、高陵社書店、1974年

H.J.ワンダーリック、土持ゲーリー法一監訳『占領下日本の教科書改革』、玉川大学出版部、1998年

『GHQ指令総集成１巻』、エムティ出版、1994年

『GHQ指令総集成２巻』、エムティ出版、1993年

『GHQ指令総集成４巻』、エムティ出版、1993年

中村新三『墨塗り教科書展を終えて：戦後教育の原点を探る』、［中村新三］、1986年

［33］文部大臣官房文書課編『終戦教育事務處理提要　第１輯』、文部大臣官房文書課、1945年、pp.217-219

［34］**第４章主要参考文献**

文化庁編『戦災等による焼失文化財　20世紀の文化財過去帳』戎光祥出版、2003年

文化庁［著］『文化財保護法五十年史』、ぎょうせい、2001年

講談社編『昭和二万日の全記録 第８巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年

昭和の歴史刊行会編『図説昭和の歴史　占領時代』、集英社、1980年

小林昌樹「国会図書館にない本（続編）戦前・占領期の雑誌を求めて」『国立国会図書館月報』、640/641号、2014年7/8月

山本明『カストリ雑誌研究：シンボルにみる風俗史』、出版ニュース社、1976年

［35］「昭和20年８月15日の太平洋戦争終結後の国全体の混乱は、国の政治体制と社会の基本構造の変革を招来し、これに経済的な混乱・疲弊が伴ったという点で明治維新の際と類似するところがあった。この事態が文化財の保存に大きな影響を及ぼすことは避けられず、所有者が経済的基盤を失ったことによる国宝等の維持・管理の悪化、円為替安による海外への流出、戦時中修理等が滞ったために生じた建造物の荒廃などの現象が広範に発生した。しかし、政府は財政の窮迫に加えて戦災復興が急務とされたことから、これに対する十分な措置は到底とることができない状況であった。」文化庁［著］『文化財保護法五十年史』、ぎょうせい、2001年、p.17

［36］「『カストリ』の語源は、（粗悪な：筆者補。以下同）かすとり（粕取り）焼酎を三合飲めば（酔い）つぶれるように、三号で廃刊するような安直な雑誌という意味とされる」『日本大百科全書』、小学館、1985年、p.251。

［37］講談社編『昭和二万日の全記録 第８巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年、p.2

［38］前掲書

［39］奇譚の名がつく雑誌、『奇譚雑誌』、『奇譚クラブ』は、ともに1947年に創刊されている。（山本明『カストリ雑誌研究：シンボルにみる風俗史』、出版ニュース社、1976年、p54, p68参照）

［40］講談社編『昭和二万日の全記録 第８巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年、p.3

［41］横浜市中央図書館においては、出品作家やトリエンナーレをパネルや図書で紹介する企画展示、「記憶という芸術@図書館～ヨコハマトリエンナーレ2014応援プログラム～」を2014年７月29日から11月３日まで開催した。（2014年７月10日市政記者発表資料 http://www.city.yokohama.jp/ne/news/press/201407/images/phpWFcSrA.pdf）（2015年１月31日確認）

［42］http://fp.yafjp.org/wp-content/uploads/2014/08/kisha-140822yma.pdf（2015年１月31日確認）

［43］当該展示チラシ「県立図書館60周年記念展示　コレクション紹介シリーズ　戦時文庫」および神奈川県立図書館ホームページ『電子版戦時文庫目録』http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital_archives/senjibunko.htmによる。

［44］この展示は「図書館の自由に関する宣言（1954年採択、1979年改訂）」の精神にかなった企画と言える。同提言第１の２には以下のように記されている。

「２．図書館は、自らの責任において作成した収集方針にもとづき資料の選択および収集を行う。その際、

⑴　多様な、対立する意見のある問題については、それぞれの観点に立つ資料を幅広く収集する。

⑵　著者の思想的、宗教的、党派的立場にとらわれて、その著作を排除することはしない。

⑶　図書館員の個人的な関心や好みによって選択をしない。

⑷　個人・組織・団体からの圧力や干渉によって収集の自由を放棄したり、紛糾をおそれて自己規制したりはしない。

⑸　寄贈資料の受入にあたっても同様である。図書館の収集した資料がどのような思想や主張をもっていようとも、それを図書館および図書館員が支持することを意味するものではない。」

## 表2　横浜美術館美術情報センターのケース内展示一覧

| 年度 | 方針 | 展覧会 | 展示タイトル | 主な展示資料 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | タイトル | 巻次等 | 著者等（開催館） | 出版社 | 出版年（会期） | 備考 | 備考2 |
| 平成20年度（2008） | 展覧会補完展示 | 木下孝則展 | なし | 油絵実習帖第5巻：靴をはくバレリーナ裸婦 | 第5巻 | 北原義雄 編 木下孝則 画、小磯良平 画 | アトリエ社 | 1952年 | | |
| | | 4人が創る「わたしの美術館」展 | 4人が創る「わたしの美術館」展関連資料展示 横浜生まれの創作版画家　川上澄生 | ゑげれすいろは人物 | | 川上澄生 | 龍星閣 | 1953年 | 貴重書 | |
| | | | | 少々昔噺 | | 川上澄生 | 龍星閣 | 1954年 | 貴重書 | |
| | | | | 版藝術 | 1924年3月号 | | 白と黒社 | 1924年 | 雑誌 | |
| | | 特別展「源氏物語の1000年―あこがれの王朝ロマン―」 | 特別展「源氏物語の1000年―あこがれの王朝ロマン―」関連資料展示 源氏物語を彩る服飾美の世界「平安王朝襲色目」 | 平安王朝襲色目 | | 河田満智子 | 日彫 | 1995年 | 折り本、染色：竹内本草着染工房 | |
| | | | | 別冊太陽（創刊六十号記念　源氏物語の色） | 60号 | | 平凡社 | 1992年 | | |
| | | セザンヌ主義父と呼ばれる画家への礼賛 | セザンヌ主義父と呼ばれる画家への礼賛 | CEZANNE,SON ART-SON ŒUVRE; TEXTE | Vol.1 | | PAUL ROSENBERG | 1936年 | 貴重書 | 美術情報センター協力、学芸主体の展示 |
| | | | | CEZANNE,SON ART-SON ŒUVRE; PLANCHES | Vol.2 | | PAUL ROSENBERG | 1936年 | 貴重書 | |
| | | | | みずゑ（セザンヌ特集号） | 第497号 | | 日本美術出版 | 1947年 | | |
| | | 横浜美術館全館コレクション展　ひびきあう東西の美術 | 横浜美術館所蔵作家　恩地孝四郎 | 日本の憂愁 | | 恩地孝四郎 | 龍星閣 | 1955年 | 貴重書 | |
| | | | | 少年少女自習画帖1 | 1 | 板倉賛治ほか 編 | 大日本雄弁会講談社 | 1931年 | 中村文庫 | |
| | | | | 槐多の歌へる | | 村山槐多 著 | アルス | 1927年 | 貴重書／装丁 恩地孝四郎 | |
| 平成21年度（2009） | | 「金氏徹平 溶け出す都市、空白の森」展 | 金氏徹平　溶け出す都市、空白の森関連資料展示 | 金氏徹平展 splash&flake | | 広島市現代美術館 | | 2007年6月2日－7月8日 | リーフレット／作家ファイルより | |
| | | | | ヨコハマ・アートナビ | 2008年10月号、第119号 | | 横浜市芸術文化振興財団 | 2008年 | 雑誌 | |
| | | | | 笑い展　現代アートにみる「おかしみ」の事情 | | 森美術館 | | | チラシ／作家ファイルより | |
| | | 「フランス絵画の19世紀」展 | 「フランス絵画の19世紀」展関連資料展示 フランスの版画 | ル・ブルトン作「一等巡洋練習艦＜ラ・スーヴレーヌ号＞（19世紀）」／『海と船の発見」図版10 | | ロセル，アンドレ 編 ヴィダル，ジャン 編 | イエール・エ・ドゥマン社 | 1971年 | 一枚刷り版画 | |
| | | | | ボージャン作「19世紀初頭におけるカンカルの眺望」／『ブルターニュの発見」図版24 | | ロセル，アンドレ 編 ヴィダル，ジャン 編 | イエール・エ・ドゥマン社 | 1971年 | 一枚刷り版画 | |
| | | 大・開港展　徳川将軍家と幕末明治の美術 | 「大・開港展」関連資料展示 明治の浮世絵師 小林清親 | 「画豪清親自画像」／『清親画伝」掲載 | | 黒崎信 | 松本平吉 | 1927年 | 貴重書 | |
| | | 「東芋　断面の世代」展 | 東芋　断面の世代　関連資料展示 | Comme des Garcons 14 | | | | | リーフレット／作家ファイルより | |
| | | | | キリンコンテンポラリー・アワード1999受賞作品展 | | | | | チラシ／作家ファイルより | |
| | | | | ヨコハマ・アートナビ | 2009年12月号、第133号 | | 横浜市芸術文化振興財団 | 2008年 | | |

| 年度 | 方針 | 展覧会 | 展示タイトル | 主な展示資料 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | タイトル | 巻次等 | 著者等（開催館） | 出版社 | 出版年（会期） | 備考 | 備考2 |
| 平成22年度（2010） | 展覧会補完展示 | ポンペイ展 古代ローマ文明の奇跡 | 『ミケランジェロ・システィーナ礼拝堂」 | ミケランジェロ・システィーナ礼拝堂　1：旧約の世界1 | 1 | コラルッチ，ジャンルイジ 解説 岡村崔 撮 若桑みどり 監訳 | 日本テレビ放送網 | 1990年 | 大型本 | |
| | | ドガ展 | 『在外秘法」・『浮世絵聚花」 | 浮世絵聚花16：フリーア美術館 | 16 | スターン，ハロルド・P. 橋崎宗重 金子重隆 訳 | 小学館 | 1981年 | 大型本 | |
| | | | | 在外秘宝 鈴木春信：欧米収蔵浮世絵集成 | | 橋崎宗重 編 | 学習研究社 | 1972年 | 大型本 | |
| 平成23年度（2011） | 所蔵資料紹介展示 | | 美術情報センター面白カタログ紹介1「ビジョンズ・オブ・ジャパン展」 | VISIONS OF JAPAN | | VICTORIA & ALBERT MUSEUM | Japan Foundation | 1991年9月17日－1992年1月5日 | 3分冊、図版28枚 | |
| | | | 美術情報センター面白カタログ紹介2「工夫を凝らした美術展カタログ」 | 美術館は白亜紀の夢を見る | | 埼玉県立近代美術館 | 埼玉県立近代美術館 | 2006年10月7日－12月24日 | パンフレット5部、CDR 1枚、化石1個 他 | |
| | | | | BERNARD SCHULTZE: DIE WELT DER MIGOFS | | STAATLICHE KUNSTHALLE BADEN-BADEN | | | | |
| | | | | I GIOCHI DEL MALESSERE | | APOLINAIRE DE MILANO | | 1967年－1968年 | | |
| 平成24年度（2012） | | | 美術情報センター面白カタログ紹介3「工夫を凝らした美術展カタログ」 | 現代美術のABC：アートはあなたのそばにある 平成17年度市町村立美術館等活性化事業 第6回共同巡回展 | | 第6回共同巡回展実行委員会（福井美術館 他） | 第6回共同巡回展実行委員会 | 2005年7月23日－8月28日 他 | カード編32枚と冊子編1冊 | |
| 平成25年度（2013） | | | | Otaku：personalita, spazio, citta＝おたく：人格，空間，都市＝Otaku：persona, space, city：Padiglione giappone, IX Mostra Internazionale di Architettura La Biennale di Venezia | | International Architectural Exhibition | | 2004年9月12日－11月7日 | フィギュア1体付 | |
| 平成26年度（2014） | | | | デジタルフォトジャーナリズム展 | | 日本新聞博物館 | 日本新聞博物館（ニュースパーク） | 2002年5月28日－2002年7月28日 | 3分冊 | |
| 平成26年度（2014） | 調査研究型展示 | ヨコハマトリエンナーレ2014 華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある | 横浜美術館美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連「焚書」―禁じられた書物と文化財―（前期・後期） | Historische Kronyck | | Gottfried, Johann Ludwig | Pieter vander Aa | 1698年 | | |
| | | | | TAG DER DEUTSCHEN KUNST | | Hoffmann, Heinrich Müller, Albert Burckhard | Raumbild-Verlag Otto ShÖnstein | 1937年 | 立体写真100枚、専用メガネ（ピュアー）付 | |

## 表３ 「書物と文化財の毀損」事例一覧

### 1）「書物と文化財」の毀損事例

**海外の事例**

| 歴史事象 | 紹介事例 | 年代 | 該当資料番号 | 主体 | 対象 | 方法 | 公開／非公開 | 目的 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東ローマ帝国における聖像禁止令の事例 | ハギアソフィア寺院にみられる聖像禁止令の影響 | 8世紀半ば | [30], cf.[29] | 聖像否定派 | 文化財 | 損壊 | （寺院） | 偶像破壊 |
| ルネサンス期フィレンツェにおける神権政治 | ドミニコ会修道士ジロラモ・サヴォナローラが「虚飾の焼却」と称して異教的な美術品や書物などを焼却 | 1497－1498 | ③ | サヴォナローラ | 書物・文化財 | 焼却 | 公開（広場） | 権力批判 |
| マルティン・ルターによる宗教改革とその余波 | マルティン・ルターがヴィッテンベルクのマルクト広場で教皇勅書を焼く 1520年12月10日 | 1520年12月10日 | 1, cf.3 | 個人 | 書物 | 焼却 | 公開 | 抵抗 |
| | ドイツにおける教会内聖像の破壊活動 | 15?? | 2, ④ | 私的団体 | 文化財 | 焼却・損壊 | 公開 | その他私的理由（宗教不信） |
| | 落書きされたエラスムス像 | | [31], ② | 個人 | 書物 | 損壊 | | 偶像破壊 |
| | ネーデルランドにおける偶像破壊 | 1520年代- | [31], ② | 平信徒 | 文化財 | 損壊 | 公開 | 偶像破壊 |
| ナチスドイツの文化言論統制と弾圧 | 「ドイツ芸術の日」を記念してパレード「ドイツ文化の2000年」が挙行される | 1937年7月18日 | 4 | 公的権力 | 文化財 | その他プロパガンダ | 公開 | 弾圧 |
| | 「ドイツ芸術の家」落成に合わせて「大ドイツ芸術展」がミュンヘンで開幕 | 1937年7月18日 | 4 | 公的権力 | 文化財 | その他プロパガンダ | 公開 | 弾圧 |
| | ミュンヘン、旧考古学研究所で「退廃芸術展」が開幕 | 1937年7月19日 | 4, 9, [13], [14], cf.[15] | 公的権力 | 文化財 | 中傷・焼却 | 公開 | 弾圧 |
| | ベルリン、オーペルンプラッツにてナチスが「非ドイツ的精神に対して」の名目で焚書を行う | 1933年5月10日 | 5, [5], ① | 公的権力 | 書物 | 焼却 | 公開 | 弾圧 |
| | ミュンヘン、ケーニヒスプラッツにてナチスが焚書を行う | 1933年5月10日 | 6, ([6]) | 公的権力 | 書物 | 焼却 | 公開 | 弾圧 |
| スペイン内戦 | 共和国派の民兵によるカトリック教会聖像破壊 | スペイン内戦（1936年7月18日－1939年3月28日）初期 | [32] | 私的団体 | 文化財 | 損壊 | 公開 | 戦争 |
| 19世紀後半から20世紀にかけて文学作品の発行禁止措置 | 海外発禁本（『ボヴァリー夫人』、『悪の華』、『女の友達』、『ユリシーズ』ほか） | 1850－1960年代 | ⑦ | | 書物 | 発禁 | 公開 | |
| 文化大革命 | チベットの仏像・寺院の破壊 | 19??年 | [33] | 公的権力 | 文化財 | 損壊 | 公開 | 弾圧 |
| | ソ連首脳の人形を紅衛兵が引き回す | 1967年 | ⑧ | 公的権力 | 図画 | 中傷 | 公開 | 思想統制 |
| | ジョンソン大統領の似顔絵を子どもたちが嘲る | 1967年 | ⑧ | 公的権力 | 図画 | 中傷 | 公開 | 思想統制 |
| アフガニスタンのスンニ派過激組織タリバーンによる偶像破壊 | 2001年2月26日、タリバーンの指導者オマル師は偶像破壊令を布告し、3月にバーミヤン仏教遺跡群の石像を破壊した | 2001年3月18日報道（※1 外務省発表資料による） | [34] | スンニ派過激組織 | 文化財 | 損壊 | 公開 | 弾圧 |

**日本の事例**

| 歴史事象 | 紹介事例 | 年代 | 該当資料番号 | 主体 | 対象 | 方法 | 公開／非公開 | 目的 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 「神仏判然令」と廃仏毀釈運動 | 法隆寺では一部の僧侶が菅原天満宮を破壊した | 1868年3月27日 | [19] | 団体 | 文化財 | 損壊 | 公開 | 法令遵守（神仏判然例の行き過ぎた解釈） |
| 日本の敗戦に伴う教育政策の転換 | GHQ指令「宣伝用刊行物の没収」から逃れるため、金沢文庫の須弥壇に隠された「貸出文庫（時局文庫）」 | 1946年3月17日以降 | [28] | 公的機関 | 書物 | 隠匿 | 非公開 | 隠滅 |
| | 文部省通牒「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」によって、「省略削除」等の基準が明示される | 1945年9月20日 | [16], [17] | 公的機関 | 書物 | 検閲 | 公開 | 方針転換 |
| | GHQにより「日本教育制度ニ対スル管理政策」が発せられた後、師範学校において焼却処分の対象となった指導書 | 1945年10月22日以降？ | 11, 12, 13 | 公的機関 | 書物 | 焼却 | 非公開 | 隠滅 |
| 占領下の日本における「墨塗り教科書」 | 「墨塗り教科書」 | 1945年9月20日以降 | [17], 14, cf.15, 16-19, ⑪, cf.⑫, ⑬-⑮, cf.⑯ | 公的権力 | 書物 | 損壊 | 公開 | 方針転換 |
| 戦後日本における文化財焼亡 | 法隆寺金堂壁画焼失（京都府） | 1949年1月26日 | 20, ⑨ | 個人? | 文化財 | 火災 | | その他私的理由（失火） |
| | 金閣寺焼失（京都府） | 1950年7月2日 | 20 | 個人 | 文化財 | 火災 | 公開 | その他私的理由（放火） |
| | 長楽寺本堂焼失（千葉県） | 1950年2月12日 | 20 | 個人 | 文化財 | 火災 | | その他私的理由（失火） |
| | 愛媛県松山城筒井門焼失（愛媛県） | 1949年2月27日 | 20 | 個人 | 文化財 | 火災 | | その他私的理由（放火） |
| | 福山城（松前城）焼失（北海道） | 1949年6月5日 | 20 | 個人 | 文化財 | 火災 | | 類焼 |
| 悪書追放運動 | 南千住警察署、「防犯協会」、「母の会」による「青少年保護育成運動期間」中の「悪書回収」 | 1955年 | 21 | 公的機関、団体 | 書物 | 損壊 | 公開 | その他 |
| 日本における昭和から明治期にかけての文学作品の発行禁止処分 | 国内の発禁本（田山花袋、永井荷風、志賀直哉、小林多喜二ほか） | 明治-昭和 | ⑤ | 公的権力 | 書物 | 発禁 | 公開 | |
| | 翻訳発禁本（『ユリシーズ』『チャタレイ夫人の恋人』『デカメロン』『悪徳の栄え』ほか） | 大正-昭和 | ⑥ | 公的権力 | 書物 | 発禁 | 公開 | |
| 芸術活動としての焚書 | 本を窯で焼成した美術作品、西村陽平《新修漢和大字典》2000年 ほか | 2000年 | [24] | 個人 | 書物 | 焼却 | 非公開 | 芸術行為 |
| | 本を炭化させた美術作品、遠藤利克《コンテナー―焼かれた言葉―》1993－2010年 ほか | 1993-2010 | [24] | 個人 | 書物 | 焼却 | 非公開 | 芸術行為 |
| 今日の日本における図書館蔵書の損壊 | アンネの日記破り取り事件 | 2014年2月21日報道（※2『朝日新聞』記事より） | [23], cf.10, | 個人 | 書物 | 損壊 | 公開 | その他（「思想的背景はない」とされる） |
| 美術展における作品の一部被覆 | 愛知県美術館が警察の通告を受け、展示中の鷹野隆大作品の一部を布で覆う | 2014年9月10日報道（※3『朝日新聞』記事より） | [26], cf.[27] | 公的機関（展覧会主催者） | 文化財 | 隠蔽 | 公開 | その他（「権力介入」を示す） |

※1 「タリバーンによる彫像破壊令問題」（2001年3月21日 外務省発表資料 http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/bamiyan.html、2014年1月31日アクセス）によれば、「彫像破壊令発出後、バーミヤン地方が封鎖されていたため、実際に破壊活動が行われているという事実を確認することは困難であったが、18日、CNNで報じられた爆破後のバーミヤン遺跡の画像によれば、2体の仏像は双方とも足が落ち、頭部、胴部等がかなり破壊されている」と記述されている。

※2 『朝日新聞』2014年2月21日朝刊、38ページ社会面

※3 『朝日新聞』2014年9月10日夕刊、4ページ文化面

### 2） 書物・文化財の保存運動と抵抗

| 歴史事象 | 紹介事例 | 年代 | 該当資料番号 |
|---|---|---|---|
| ナチスドイツの文化言論統制と弾圧 | 「第一回文化防衛のための国際作家会議」がパリのメゾン・ド・ラ・ミュチュアリテにて開催される。1935年 | 1935年 | 8 |
| | 「アンネの日記展」が銀座・松坂屋で開催される | 1978年8月10日－8月15日 | 10 |
| | 1991年、退廃芸術展の再現展が開催され、アメリカやドイツを巡回する。 | 1991年 | 9 |
| | 焚書が行われたベルリンのオーペルンプラッツ（ベーベルプラッツ）に作られた、イスラエル人彫刻家・ミシャ・ウルマンによる記念碑《図書館》 | 1995年 | 7 |
| 戦後の文化財の保護 | 焼失した金閣寺が再建される | 1955年 | ⑩ |
| バーミヤン遺跡の保存 | ユネスコを中心とし、バーミヤン遺跡の保存修復事業が展開される | 2003年- | [34] |

## 表4　美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示 「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」ケース展示資料目録

**展示期間 2014年8月1日㈮－11月30日㈰　前期：2014年8月1日㈮－9月30日㈫　後期：10月1日㈬－11月30日㈰**

### 宗教改革期の書物や聖像の破壊

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 図版（作者、技法、テクスト） |
|---|---|---|
| 1 | 書名　Historische Kronyck（史的年代記）<br>著者名　Johann Ludwig Gottfried（1584頃－1633），S. de Vries〔オランダ語訳〕<br>出版社　Pieter van der Aa<br>出版年　1698年<br>サイズ（縦）　36.3cm<br>掲載ページ　1707－1708<br>寄贈者　菅野陽氏<br>請求記号　F209/G72 | 作者　マテウス・メリアン（1593－1650）<br>Matthäus Merian<br>技法　銅版画<br>テクスト　《教会法を焼き捨てるルター博士》<br>D. Luther verbrandt Pauslijck Reght<br>「1520年12月10日、ルター博士は、ヴィッテンベルクの多数の学生や神学者たちを前にして、公の場で教会法と教皇レオの勅書を焼き捨てた」 |
| 2 | 書名　Der Deutsche Einblatt－Holzschnitt in der ersten－Hälfte des 16. Jahrhunderts. 26. Lfg（16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第26巻より）<br>著者名　Max Geisberg（1875－1943）<br>出版社　Hugo Schmidt<br>出版年　1927年<br>サイズ　47.7×39.7cm<br>掲載ページ　図版No.27<br>請求記号　F733/G32/1－26 | 作者　エアハルト・シェーン（1500－1542頃）、Erhard Schön<br>技法　木版画、1530年頃（ファクシミリ印刷）<br>テクスト　《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》<br>Klagrede der armen verfolgten Götzen und Tempelbilder / über so ungleich urtayl und straffe（Die Klage der Heiligenbilder） |
| 3 | 書名　Der Deutsche Einblatt－Holzschnitt in der ersten－Hälfte des 16. Jahrhunderts. 31. Lfg（16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第31巻より）<br>著者名　Max Geisberg（1875－1943）<br>出版社　Hugo Schmidt<br>出版年　1928年<br>サイズ　33.2×40.2cm<br>掲載ページ　図版No.39<br>請求記号　F733/G32/1－31　★ | 作者　エアハルト・シェーン（1500－1542頃）、Erhard Schön<br>技法　木版画、1524年（ファクシミリ印刷）<br>テクスト　《賢者の家と愚者の家、マタイ伝7章より》<br>Das Hauß des Weysen und das haus des unweisen manß. Math. Vij（Die Häuser des weisen und des törichten mannes） |

### 第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 図版（作者、技法、テクスト） |
|---|---|---|
| 4 | 書名　Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）<br>著者名　Heinrich Hoffmann〔写真〕，Albert Burckhard Müller〔文〕<br>出版社　Raumbild－Verlag Otto Schönstein<br>出版年　1937年<br>サイズ（縦）　29.7cm<br>請求記号　F748.34/H81/2 | 作者　ハインリヒ・ホフマン（1885－1957）<br>Heinrich Hoffmann<br>技法　ステレオ写真<br>テクスト　『ドイツ芸術の日』所収、ステレオ写真と専用眼鏡 Raumbildanfnahmen aus dem Buch "Tag der Deutschen Kunst" |
| 5 | 図版出典<br>書名　Degenerate Art：the fate of the avant－garde in Nazi Germany（退廃芸術：ナチスドイツにおける前衛芸術の運命）〔展覧会カタログ〕<br>開催館　Los Angeles County Museum of Art他<br>会期　1991年2月17日－1991年5月12日<br>出版社　Harry N. Abrams<br>出版年　1991年<br>サイズ（縦）　31cm<br>掲載ページ　396<br>請求記号　FK53/L 1/91 | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　《ベルリンにおけるナチスの焚書、1933年5月10日》<br>Nazi book－burning. Berlin<br>（複写） |
| 6 | 図版出典<br>書名　Bürokratie und Kult：das Parteizentrum der NSDAP am Königsplatz in München. Geschichte und Rezeption（官僚主義とカルト：ミュンヘン、ケーニヒスプラッツのナチ党センター。その歴史と受容）<br>著者名　Iris Lauterbach他<br>出版社　Deutscher Kunstverlag<br>出版年　1995年<br>サイズ（縦）　27.9cm<br>掲載ページ　37<br>寄贈者　Thomas Lersch博士<br>請求記号　F523.34/L37 | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　《ミュンヘン、ケーニヒスプラッツにおけるナチスの焚書、1933年5月10日》<br>Bücherverbrennung auf dem Königsplatz am 10. 5. 1933<br>（複写） |
| 7 | 図版出典<br>書名　美術手帖<br>巻号　51巻767号<br>出版社　美術出版社<br>出版年月　1999年2月<br>サイズ（縦）　21cm<br>掲載ページ　48－49<br>請求記号　Z00000598 | 作者　ミシャ・ウルマン（1939年生まれ）<br>Micha Ullman<br>1995年<br>嘉藤笑子撮影<br>テクスト　《図書館》Bibliothek<br>（複写） |
| 8 | 書名　Gisèle Freund：Photographien（ジゼル・フロイント写真集）<br>著者名　Gisèle Freund<br>出版社　Schirmer/Mosel<br>出版年　1985年<br>サイズ（縦）　29.6cm<br>掲載ページ　38－39<br>請求記号　F748.34/F46　★★★ | 作者　ジゼル・フロイント（1912－2000）撮影<br>Gisèle Freund<br>テクスト　《第一回文化防衛のための国際作家会議、メゾン・ド・ラ・ミュチュアリテにて、パリ、1935年》<br>1. Internationaler Schriftsteller－Kongress zur Verteidigung der Kultur, Saal der Mutualité, Paris 1935 |
| 9 | 書名　Degenerate Art：the fate of the avant－garde in Nazi Germany（退廃芸術：ナチスドイツにおける前衛芸術の運命）〔展覧会カタログ〕<br>開催館　Los Angeles County Museum of Art他<br>会期　1991年2月17日－ 1991年5月12日<br>出版社　Harry N. Abrams<br>出版年　1991年<br>サイズ（縦）　31cm<br>掲載ページ　56<br>請求記号　FK53/L 1/91　★★★ | テクスト　《退廃芸術展の第3展示室壁面の再現図》<br>Reconstruction of the Room 3 of the exhibition "Entartete Kunst" |
| 10 | 書名　アンネの日記展〔展覧会カタログ〕<br>会場　松坂屋・銀座<br>会期　1978年8月10日－1978年8月15日<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年　1978年<br>サイズ（縦）　23.8cm<br>掲載ページ　82－83<br>寄贈者　武田厚氏<br>請求記号　K36/M4/78　★★★ | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　《アンネ・フランクの肖像》<br>Portrait of Anne Frank<br>1941年12月撮影 |

### 占領下の日本で教科書や指導書に下されたさまざまな処分

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 図版（作者、技法、テクスト） |
|---|---|---|
| 11 | 書名　尋常小學新定畫帖 第一學年 教師用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1910年<br>サイズ　12.6×18.5cm<br>掲載ページ　表紙<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/29/1　★★ | テクスト　〔焼却対象となった指導書〕 |
| 12 | 書名　圖畫教授之理論及實際<br>著者名　白濱徵<br>出版社　大日本図書<br>出版年　1911年<br>サイズ（縦）　22.2cm<br>掲載ページ　表紙<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NA/12/b　★★ | テクスト　〔焼却対象となった指導書〕 |
| 13 | 書名　實驗圖畫教授法<br>著者名　阿部七五三吉<br>出版社　弘道館<br>出版年　1911年<br>サイズ（縦）　22.5cm〔製本〕<br>掲載ページ　110－111<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NA/11　★★ | テクスト　〔焼却対象となった指導書〕 |
| 14 | 書名　エノホン 四<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1941年<br>サイズ　14.8×21.1cm<br>掲載ページ　図版20<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/101/4　★★ | テクスト　《20. 勇ましい 兵たい》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「削除」の朱入り〕 |
| 15 | 書名　エノホン 四 教師用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1941年<br>サイズ　14.6×21cm<br>掲載ページ　41－42<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/102/4　★★ | テクスト　「20. 勇ましい 兵たい 思想的表現 一時限」<br>〔資料No.14《20. 勇ましい 兵たい》の指導要領〕 |
| 16 | 書名　初等科圖畫 二 女子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1942年<br>サイズ　14.9×21.1cm<br>掲載ページ　図版8<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/110/2c　★★ | テクスト　《8. 防空演習》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「削除」の朱入り〕 |
| 17 | 書名　初等科圖畫 二 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1942年<br>サイズ　14.9×21cm<br>掲載ページ　図版28<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/2　★★ | テクスト　《28. 隣り組》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「取扱注意」の朱入り〕 |

## 表４続き

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 図版（作者、技法、テクスト） |
|---|---|---|
| 18 | 書名　初等科圖畫 三 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1943年<br>サイズ　14.6×20.9cm<br>掲載ページ　図版６<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/3b　★★ | テクスト　《６．ポスター（海のまもり）》〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「一部削除」の朱入り〕 |
| 19 | 書名　文藝春秋 臨時増刊<br>巻号　63巻９号<br>出版社　文藝春秋<br>出版年月　1985年８月<br>サイズ（縦）　25.7cm<br>掲載ページ　58－59<br>寄贈者　浜口タカシ氏<br>請求記号　Z00000604　★★ | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　「墨塗り教科書は続いている」渡部昇一〔文〕 |

**戦後から現代の日本における書物や文化財の毀損**

| | | |
|---|---|---|
| 20 | 書名　アサヒグラフ<br>巻号　1352号<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年月日　1950年７月19日<br>サイズ（縦）　37.2cm〔製本〕<br>掲載ページ　12－13<br>寄贈者　ペンタックスギャラリー<br>請求記号　Z00000005　★★ | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　「鹿苑寺金閣炎上　焼亡つづく國宝文化財」 |
| 21 | 書名　アサヒグラフ<br>巻号　1606号<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年月日　1955年６月８日<br>サイズ（縦）　36.4cm<br>掲載ページ　4－5<br>寄贈者　ペンタックスギャラリー<br>請求記号　Z00000005　★★ | 作者　吉江雅祥（1928年生まれ）撮影<br>テクスト　特集記事「閉出された家庭の悪書」より |

★…９月30日まで展示
★★…10月１日から展示
★★★…９月30日以降は、関連資料コーナーにて閲覧可能

## 表5　美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」関連資料コーナー資料目録

**会期　2014年8月1日㈮－11月30日㈰**

### 序

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [1] | 書名　華氏451度　新訳版<br>著者名　レイ・ブラッドベリ（1920－2012）Ray Bradbury<br>出版社　早川書房<br>出版年　2014年<br>サイズ（縦）　15.7cm<br>請求記号　933/B71 | |

### 宗教改革期の書物や聖像の破壊

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [2] | 書名　宗教改革時代のドイツ木版画：ゴータ市美術館所蔵作品による<br>開催館　〔展覧会カタログ〕<br>会期　国立西洋美術館<br>出版社　1995年1月14日 － 1995年3月5日<br>出版年　国立西洋美術館<br>サイズ（縦）　1995年<br>掲載ページ　27.9cm<br>寄贈者　100－105<br>請求記号　国立西洋美術館<br>K36/K3/95 | 作者　森田安一（1940年生まれ）著<br>「木版画と宗教改革」 |
| [3] | 書名　大和文華<br>巻号　79号<br>出版社　大和文華館<br>出版年月　1988年2月<br>サイズ（縦）　25.9cm<br>掲載ページ　P31－48<br>寄贈者　菅野陽氏<br>請求記号　Z00000730 | 作者　菅野陽（1919－1995）著<br>テクスト　「蘭書『可鹿涅乙吉』と石川大浪の『ヒポクラテス画像』ほか」 |
| [4] | 書名　HANGA：東西交流の波 〔展覧会カタログ〕<br>開催館　山口県立萩美術館・浦上記念館 他<br>会期　2004年9月11日 － 2004年10月24日<br>出版社　東京新聞<br>出版年　2004年<br>サイズ（縦）　22.1cm<br>掲載ページ　97<br>寄贈者　山口県立萩美術館・浦上記念館<br>請求記号　K77/Y2/2004 | テクスト　J. L. ゴットフリート著『史的年代記』より<br>《ロードス島の巨鋼人図》<br>〔神戸市立博物館所蔵〕 |

### 第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [5] | 書名　芸術の危機：ヒトラーと退廃美術〔展覧会カタログ〕<br>開催館　神奈川県立近代美術館 他<br>会期　1995年8月13日 － 1995年9月24日<br>出版社　アイメックス・ファインアート<br>出版年　1995年<br>サイズ（縦）　22cm<br>掲載ページ　146<br>寄贈者　神奈川県立近代美術館<br>請求記号　K37/K1/95 | 作者　［ゲオルク・パール（1900－1963）］撮影<br>Georg Pahl<br>テクスト　《ナチによる大がかりな焚書》 |
| [6] | 書名　Bürokratie und Kult : das Parteizentrum der NSDAP am Königsplatz in München. Geschichte und Rezeption<br>（官僚主義とカルト：ミュンヘン、ケーニヒスプラッツのナチ党センター。その歴史と受容）<br>著者名　Iris Lauterbach 他<br>出版社　Deutscher Kunstverlag<br>出版年　1995年<br>サイズ（縦）　27.9cm<br>掲載ページ　37<br>寄贈者　Thomas Lersch博士<br>請求記号　F523.34/L37 | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　《ミュンヘン、ケーニヒスプラッツにおけるナチスの焚書、1933年5月10日》<br>Bücherverbrennung auf dem Königsplatz am 10. 5. 1933 |
| [7] | 書名　Gisèle Freund：Photographien（ジゼル・フロイント写真集）<br>著者名　Gisèle Freund<br>出版社　Schirmer/Mosel<br>出版年　1985年<br>サイズ（縦）　29.6cm<br>掲載ページ　38－39<br>請求記号　F748.34/F46 | 作者　ジゼル・フロイント（1912－2000）撮影<br>テクスト　《第一回文化防衛のための国際作家会議、メゾン・ド・ラ・ミュチュアリテにて、パリ、1935年》<br>I. Internationaler Schriftsteller-Kongress zur Verteidigung der Kultur, Saal der Mutualité, Paris 1935 |
| [8] | 書名　芸術新潮<br>巻号　51巻7号 通巻607号<br>出版社　新潮社<br>出版年月　2000年7月<br>サイズ（縦）　28.2cm<br>掲載ページ　108－111<br>請求記号　Z00000666 | 作者　飯吉光夫（1935年生まれ）著<br>テクスト　「バーナード・ショーの髯をカット！<br>文芸 写真家ジゼル・フロイント追悼」 |
| [9] | 書名　美術手帖<br>巻号　51巻767号<br>出版社　美術出版社<br>出版年月　1999年2月<br>サイズ（縦）　21cm<br>掲載ページ　48－49<br>請求記号　Z00000598 | 作者　ミシャ・ウルマン（1939年生まれ）<br>Micha Ullman<br>1995年<br>嘉藤笑子撮影<br>テクスト　《図書館》Bibliothek |
| [10] | 書名　Kunstforum international<br>巻号　131号 1995年8－10月<br>出版社　Kunstforum international<br>出版年月　1995年<br>サイズ（縦）　23.9cm<br>掲載ページ　411<br>請求記号　Z00000182 | 作者　Heinz-Norbert Jocks（1955年生まれ）著<br>テクスト　Micha Ullman（ミシャ・ウルマン）<br>»Schutzzone der Zeichen«<br>Galerie Cora Hölzl, Düsseldorf, 25.3 - 19.5. 1995 |
| [11] | 書名　芸術新潮<br>巻号　45巻5号 通巻533号<br>出版社　新潮社<br>出版年月　1994年5月<br>サイズ（縦）　28.2cm<br>掲載ページ　98<br>請求記号　Z00000666 | テクスト　「ヒトラー神話を除で支えた写真家ホフマン」 |
| [12] | 書名　Degenerate Art : the fate of the avant－garde in Nazi Germany<br>（退廃芸術：ナチスドイツにおける前衛芸術の運命）<br>〔展覧会カタログ〕<br>開催館　Los Angeles County Museum of Art 他<br>会期　1991年2月17日－1991年5月12日<br>出版社　Harry N. Abrams<br>出版年　1991年<br>サイズ（縦）　31cm<br>掲載ページ　56<br>請求記号　FK53/L1/91 | テクスト　《退廃芸術展の第3展示室壁面の再現図》<br>Reconstruction of the Room 3 of the exhibition "Entartete Kunst" |
| [13] | 書名　季刊みづゑ<br>巻号　962号<br>出版社　美術出版社<br>出版年月　1992年3月<br>サイズ（縦）　29.4cm<br>掲載ページ　36－49<br>請求記号　Z00000673 | 作者　平井正（1929年生まれ）著<br>テクスト　「ドイツ頽廃美術展」 |
| [14] | 書名　芸術新潮<br>巻号　43巻9号 通巻513号<br>出版社　新潮社<br>出版年月　1992年9月<br>サイズ（縦）　28.2cm<br>請求記号　Z00000666 | テクスト　〔特集〕ナチスが捺した頽廃芸術の烙印 |
| [15] | 書名　ヨーロッパの略奪：ナチス・ドイツ占領下における美術品の運命<br>著者名　Lynn H Nicholas, 高橋早苗 訳<br>出版社　白水社<br>出版年　2002年<br>サイズ（縦）　19.4cm<br>請求記号　707.9/N71 | |

### 占領下の日本で処分対象となった教科書や指導書に下されたさまざまな処分

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [16] | 書名　中村文庫目録<br>著者名　横浜美術館美術図書室 編<br>出版社　横浜美術館美術図書室<br>出版年　1992年<br>サイズ（縦）　25.6cm<br>請求記号　375.9/Y75 | |
| [17] | 書名　日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系<br>著者名　中村 亨（1914－1993）<br>出版社　日本文教出版<br>出版年　1979年<br>サイズ（縦）　26.2cm<br>掲載ページ　301－304<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　375.72/N37 | テクスト　「第6章　戦後の教育改革と新教育制度下の美術教育　黒塗り教科書　終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」 |
| [18] | 書名　ピコラマガジン<br>巻号　31号<br>出版社　横浜美術館子どものアトリエ<br>出版年月　2000年10月<br>サイズ（縦）　26.7cm<br>掲載ページ　1－4<br>請求記号　Z00001980 | テクスト　〔特集〕中村文庫がインターネットになったよ！ |

## 表５続き

**戦後から現代の日本における書物や文化財の毀損**

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [19]※ | 書名　芸術新潮<br>巻号　45巻５号 通巻533号<br>出版社　新潮社<br>出版年月　1994年５月<br>サイズ（縦）28.2cm<br>掲載ページ 52<br>請求記号　Z00000666<br>※ 前掲No.11と同一資料 | テクスト　〔特集〕法隆寺千四百年のいのち<br>「明治の廃仏毀釈で、壊されたものはありますか？」 |
| [20] | 書名　古写真で見る失われた城：保存版<br>著者名　平井 聖,小沢 健志 監修<br>出版社　世界文化社<br>出版年　2000年<br>サイズ（縦）25.8cm<br>寄贈者　世界文化社<br>請求記号　521.82/Ko83 | |
| [21] | 書名　江戸城 小田原城：八王子城 佐倉城 大多喜城 石垣山一夜城<br>著者名<br>出版社　学習研究社<br>出版年　2004年<br>サイズ（縦）29.2cm<br>寄贈者　学習研究社<br>請求記号　521.82/Y81 | |
| [22] | 書名　アンネの日記展〔展覧会カタログ〕<br>会場　松坂屋・銀座<br>会期　1978年８月10日－1978年８月15日<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年　1978年<br>サイズ（縦）23.8cm<br>掲載ページ 82－83<br>寄贈者　武田厚氏<br>請求記号　K36/M4/78 | 作者　撮影者不詳<br>テクスト　《アンネ・フランクの肖像》<br>Portrait of Anne Frank<br>1941年12月撮影 |
| [23] | 記事名　アンネの日記 次々破られる<br>関連含め220冊 都内の公立図書館被害<br>紙名　朝日新聞<br>掲載年月日 2014年２月21日 朝刊<br>掲載面　38（社会面）　（スクラップファイル所収） | テクスト　東京都内の公立図書館で、第２次大戦中のナチス・ドイツのユダヤ人迫害下で書かれた「アンネの日記」や関連書籍220冊以上がページを破られる被害に遭ったことがわかった。 |
| [24] | 書名　これは本ではない：ブック・アートの広がり〔展覧会カタログ〕<br>会場　うらわ美術館<br>会期　2010年11月20日－2011年１月23日<br>出版社　美術館連絡協議会<br>出版年　2010年<br>サイズ（縦）36.3cm<br>掲載ページ 34－37, 60－61<br>寄贈者　うらわ美術館<br>請求記号　K34/U1/2010 | テクスト　西村陽平（1947年生まれ）<br>《新修漢和大字典》2000年 ほか<br><br>遠藤利克（1950年生まれ）<br>《コンテナー―焼かれた言葉―》1993－2010年<br>ほか |
| [25] | 書名　In my Room（イン マイ ルーム）<br>著者名　鷹野隆大 著<br>出版社　蒼穹舎<br>出版年　2005年<br>サイズ（縦）29.3cm<br>寄贈者　天野太郎氏<br>請求記号　748/Ta47 | |
| [26] | 記事名　権力の介入 隠さず見せた<br>「写真わいせつ」県警が対処要求；愛知県美術館 一部覆って展示<br>紙名　朝日新聞<br>掲載年月日 2014年９月10日 夕刊<br>掲載面　4（文化面）　（スクラップファイル所収） | テクスト　名古屋市の愛知県美術館で28日まで開催中の「これからの写真」展（同館、朝日新聞社主催）で、写真家鷹野隆大（51）の作品の一部が半透明の布や紙で覆われている。男性器が写っていることに対し、愛知県警が「わいせつ物の陳列にあたる」と対処を求めたためだ。 |
| [27] | 書名　美術手帖<br>巻号　66巻通巻1012号<br>出版社　美術出版社<br>出版年月　2014年10月<br>サイズ（縦）21cm<br>掲載ページ 154－157<br>請求記号　Z00000598 | 作者　土屋誠一（1975年生まれ）著<br>テクスト　「ポルノである、同時に、芸術でもある『これからの写真』展における鷹野隆大作品に対する警察介入事件への緊急提言」 |
| [28] | 記事名　戦時下の貸出文庫 県立図書館が展示<br>没収逃れ69年に発見<br>紙名　朝日新聞<br>掲載年月日 2014年10月26日 朝刊<br>掲載面　37（神奈川版・横浜）　（スクラップファイル所収） | テクスト　太平洋戦争の戦前から戦中に当時の文部省が戦意高揚のため全国に設けた「貸出文庫」。その一部を保存した県立図書館（横浜市西区）が「戦時文庫」コレクション展を本館１階で開いている。 |

**ヨーロッパとアジアにおける文化財の毀損**

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| [29] | 書名　The art of Byzantium and the medieval West : selected studies<br>著者名　Ernst Kitzinger, W. Eugene Kleinbauer<br>出版社　Indiana University Press<br>出版年　1976年<br>サイズ（縦）28.4cm<br>寄贈者　品治重忠氏<br>請求記号　F702.04/Ki79 | |
| [30] | 書名　The art of Constantinople : an introduction to Byzantine art, 330－1453<br>著者名　John Beckwith<br>出版社　Phaidon Publishers<br>出版年　1961年<br>サイズ（縦）25.2cm<br>掲載ページ 57<br>寄贈者　品治重忠氏<br>請求記号　F702.04/B31 | テクスト　《聖像否定派の十字架。ハギアソフィア寺院の南西傾斜路上の一室にあるアーチ側壁のモザイク。８世紀半ば。イスタンブール》<br>An Iconoclast Crosss in mosaic in a room over the south-west ramp in the Church of Agia Sophia ; middle of the eighth century. *Istanbul.* |
| [31] | 書名　The mirror of the artist : northern Renaissance art in its historical context<br>著者名　Craig Harbison<br>出版社　Phaidon Publishers<br>出版年　1995年<br>サイズ（縦）23.4cm<br>掲載ページ 106, 110<br>寄贈者　品治重忠氏<br>請求記号　F702.05/H32 | テクスト　《落書きされたエラスムス像》<br>セバスチャン・ミュンスター著『宇宙誌』、1550年刊より〔スペイン国立図書館蔵〕<br>Defaced portrait of Erasmus in a copy of SEBASTIAN MÜNSTER'S *Cosmographia*<br>テクスト　作者不詳<br>《ネーデルランドにおける偶像破壊》<br>1583年頃、Michael Aitsinger（生年不詳－1598）著、『De Leone Belgico』の挿絵、<br>Franz Hogenberg発行、1583年刊<br>〔大英博物館蔵〕<br>ANONYMOUS ARTIST Iconoclasm in the Netherlands, C. 1583, from Baron Eytziner, *De Leone Belgico, Cologne, 1583* |
| [32] | 書名　Les Grandes photos de la guerre d'Espagne<br>著者名　Robert Capa, David Seymour 撮影<br>Georges Soria 文<br>出版社　Jannink<br>出版年　1980年<br>サイズ（縦）28.6cm<br>掲載ページ 90－91<br>請求記号　F748.347/C16/2 | 作者　David Seymour（1911-1956）撮影<br>テクスト　《スペイン内乱（1936-39年）の初期、共和国派は教会権力に反対して偶像破壊活動を行った》<br>Vandalisme anticlérical du côté républicain, dans les premières semaines. |
| [33] | 書名　芸術新潮<br>巻号　45巻７号 通巻535号<br>出版社　新潮社<br>出版年月　1994年７月<br>サイズ（縦）28.2cm<br>掲載ページ 128<br>請求記号　Z00000666 | 作者　野町和嘉（1946年生まれ）撮影・文<br>テクスト　「文化大革命が叩き壊したチベット秘境の仏教寺院」 |
| [34] | 書名　佛教藝術<br>巻号　289号<br>出版社　毎日新聞社<br>出版年月　2006年11月<br>サイズ（縦）25.7cm<br>掲載ページ 4－5<br>請求記号　Z00000666 | テクスト　〔特集〕バーミヤーン遺跡 |

## 表6 「書物と文化財の毀損」事例調査文献目録

| No. | 資料名（書名、著者名、出版者、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号） | 付箋ページの図版／テクスト（作者、技法、タイトル） |
|---|---|---|
| ① | 書名　20世紀全記録<br>著者名　講談社<br>出版社　講談社<br>出版年　1987年<br>サイズ（縦）28.7cm<br>掲載ページ　479<br>請求記号　210.6/Ko19 | テクスト　ベルリン大学の前のオペラ広場で行われた、「非ドイツ的」書物」の焚書。ゲッペルスの反ナチス勢力に対する文化的粛清の象徴的儀式である。 |
| ② | 書名　西洋美術研究<br>巻号　6号<br>出版社　三元社<br>出版年月　2001年<br>サイズ（縦）25.7cm<br>請求記号　Z00000793 | テクスト　「特集 イコノクラスム」 |
| ③ | 書名　再生への讃歌：ボッティチェリ ギルランダイオ フィリッピーノ・リッピ<br>著者名　佐々木英也監修；森田義之責任編集；谷尾襄構成<br>出版社　日本放送出版協会<br>出版年　1991年<br>サイズ（縦）28.5cm<br>掲載ページ　p65－66, p67<br>寄贈者　二見寅夫氏<br>請求記号　702.37/Mo66/1－4 | 作者　サンドロ・ボッティチェリ（1444－1510）<br>テクスト　Sandro Botticelli<br>作者　《アペレスの『誹謗』》<br>テクスト　「シニョリーア広場でのサヴォナローラの火刑」 |
| ④ | 書名　Reformation in Nürnberg : Umbruch und Bewahrung<br>開催館　Germanisches Nationalmuseum<br>会期　1979年6月12日 －1979年 9月2日<br>出版社　Medien & Kultur<br>出版年　1979年<br>サイズ（縦）29.6cm<br>掲載ページ　133<br>請求記号　FK34/G3/79 | テクスト　《Moralische ausdeutung der bilderfrage》 |
| ⑤ | 書名　本の手帖<br>巻号　5号 2巻10号<br>出版社　昭森社<br>出版年月　1961年7月号<br>サイズ（縦）21cm<br>請求記号　Z00000647 | テクスト　「特集 発禁本」 |
| ⑥ | 書名　本の手帖<br>巻号　6号<br>出版社　昭森社<br>出版年月　1961年8月号<br>サイズ（縦）20.8cm<br>請求記号　Z00000647 | テクスト　「特集 発禁翻訳本」 |
| ⑦ | 書名　本の手帖<br>巻号　12号<br>出版社　昭森社<br>出版年月　1962年12月号<br>サイズ（縦）21.2cm<br>請求記号　Z00000647 | テクスト　「特集 海外の禁書」 |
| ⑧ | 書名　アサヒグラフ<br>巻号　2247通号増刊<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年月日　1967年4月5日号<br>サイズ（縦）34.4cm<br>掲載ページ　p20－21<br>寄贈者名　ペンタックスギャラリー<br>請求記号　Z00000005 | テクスト　文化大革命<br>「紅衛兵のデモのホコ先はソ連にも向けられ、ソ連首脳の人形をかつぎ、棺おけをひきずる姿もみられた（67年2月）」<br><br>「ジョンソン大統領の漫画にピストルをつきつける子どもたち　アメリカ帝国主義に対する憎しみは文化革命の興奮のなかで一段と強まっている　＝UPI」 |
| ⑨ | 書名　アサヒグラフ<br>巻号　51巻7号 1276通号<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年月日　1949年2月16日号<br>サイズ（縦）37.2cm<br>掲載ページ　p3<br>寄贈者名　ペンタックスギャラリー<br>請求記号　Z00000005 | テクスト　「合掌も空し！ 法隆寺金堂炎上す」 |
| ⑩ | 書名　アサヒグラフ<br>巻号　1622号<br>出版社　朝日新聞社<br>出版年月日　1955年9月28日<br>サイズ（縦）37.3cm<br>掲載ページ　p20<br>寄贈者名　ペンタックスギャラリー<br>請求記号　Z00000005 | テクスト　「金箔ついた金閣寺」 |
| ⑪ | 書名　エノホン 四<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1941年<br>サイズ　14.3cm<br>掲載ページ　図版5，図版16<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/101/4 | テクスト　《5.ひかうき》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「削除」の朱入り〕<br><br>《16.きげん節》<br>〔「一部削除」の朱入り〕 |
| ⑫ | 書名　初等科圖畫 二 女子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1942年<br>サイズ　14.4cm<br>掲載ページ　図版1，図版15，図版17<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/110/2c | テクスト　《1.色》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「取扱注意」の朱入り〕<br>《15.隣組》<br>〔「取扱注意」の朱入り〕<br>（《17.形》）<br>〔戦闘機などが描かれているが、朱による指示なし〕 |
| ⑬ | 書名　初等科圖畫 二 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1942年<br>サイズ　14.3cm<br>掲載ページ　図版13，図版15，図版30<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/2 | テクスト　《13.防空演習》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「一部削除」の朱入り〕<br>《18.演習》<br>〔「削除」の朱入り〕<br>《30.形》<br>〔一部「削除」の朱入り〕 |
| ⑭ | 書名　初等科圖畫 三 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1943年<br>サイズ　14.8cm<br>掲載ページ　図版6，図版15，図版29<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/3 | テクスト　《6．ポスター（海のまもり）》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：図の上に紙を貼る〕<br><br>《15.武道》、《29.行軍》<br>〔見開きのページ同士を糊で貼り合わせる〕 |
| ⑮ | 書名　初等科圖畫 三 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1943年<br>サイズ　14.8cm<br>掲載ページ　図版1，図版6，図版15，図版29<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/3b | テクスト　《1.色》<br>〔国民学校初等科（小学校）用教科書：「取扱注意」の朱入り〕<br>《6.ポスター》<br>〔「一部削除」の朱入り〕<br>〔「削除」の朱入り〕<br>《15.武道》、《29.行軍》<br>〔ともに「削除」の朱入り〕 |
| ⑯ | 書名　初等科圖畫 四 男子用<br>著者名　文部省<br>出版社　東京書籍<br>出版年　1943年<br>サイズ　14.6cm<br>掲載ページ　図版2，図版3，図版11，図版12，図版17，図版27<br>寄贈者　中村亨氏<br>請求記号　NK3/109/4 | テクスト　《2.配色》、《3.ポスター》、《11.銃》、《12.要塞》、《17.剣道具》《27.思ひ出》 |

## 表７　「『焚書』―禁じられた書物と文化財―」アンケート結果

**１　この展示をお知りになったきっかけを教えてください。（複数回答）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| チラシ | 4 | | |
| ホームページ | 1 | （内訳）当館 | 1 |
| メールマガジン | 0 | | |
| 新聞・雑誌 | 2 | （内訳）東京新聞 | 2 |
| 知人にすすめられて | 8 | | |
| 当センター利用時に偶然見つけた | 4 | | |
| その他 | 1 | （内訳）AFEE | 1 |

**２　この展示をご覧になろうと思われた理由を教えてください（複数回答）**

| | |
|---|---|
| タイトルに惹かれたから | 5 |
| 内容が面白そうだったから | 11 |
| 焚書や文化財の毀損の歴史に関心があるから | 6 |
| ホームページ等に掲載の『Historische Kronyck（史的年代記）』を、実際にみてみたかったから | 1 |
| ヨコハマトリエンナーレ2014と関連していると思われたから | 5 |
| その他 | 3 |

（内訳）ブラッドベリの小説に感銘をうけたから　1、『華氏451度』を読んだから　1、無記入　1

**３　展示の構成について**

**（1）　資料の分量はいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| ちょうど良い（充分、ちょうど良い、適度、適当） | 6 |
| 少ない（少ない、もう少し多い方がいい、もう少しほしかった） | 4 |
| 少量だがまとまっていた | 2 |
| 限られたスペース的にはこのくらい［が適量］ではないか | 1 |
| 不満足 | 1 |

**（2）　ひとつひとつの資料の内容はいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| 興味深かった | 3 |
| 興味深いものもあった | 1 |
| 知らないことが多かった | 1 |
| 見ごたえがあった | 1 |
| 見やすい | 1 |
| できれば、中味を見たかった | 1 |
| Good | 1 |
| よくわからなかった | 1 |

**（3）　資料と資料のつながりはいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| わかりやすい | 1 |
| 一つのケース内では、良いほうだったと思う | 1 |
| 共通のものを知ることができた | 1 |
| 悪書追放運動についてもう少しほしかった | 1 |
| 少しあいまい | 1 |
| よくわからなかった | 1 |

**（4）　資料の配置についてはいかがでしたか**

**①　見やすさ**

よい（よい、よかった、適当　○、◎）9

| | |
|---|---|
| 見やすかった | 1 |
| × | 1 |

**②　美しさ**

| | |
|---|---|
| よい（よい、○、◎） | 5 |
| 整然としていてよかった | 1 |
| 普通 | 2 |
| × | 1 |

**（5）　展示のタイトル“「焚書」―禁じられた書物と文化財―”と資料の関係はいかがでしたか**

・いろんな例が挙げられていておもしろかった
・よく関連付けられていたと思う
・良い
・おもしろい切り口と思いました
・貴重な資料、関係性はわかりやすく展示されていると思います。
・『華氏451度』は政治的理由で焚書をしたと思うのですが、ルターの95か条に関する焚書は宗教の腐敗への反発なので趣旨がちがう気がしました。でも焚書の歴史がよくわかりました。
・絵は理解できたが、もっと大きな字で、見やすい場所に説明がほしかった（全く読めなかった）

**４　展示のキャプション（題箋）や説明文について**

**（1）　内容はいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| よい（よい、適当、ていねいでよい） | 6 |
| わかりやすい | 1 |
| わかりやすくまとめられていて参考になった | 1 |
| 全く読めなかったので感想不能。遠くて小さい | 1 |

**（2）　長さはいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| よい（よい、ちょうど良い、適当） | 5 |
| 展示としてはちょうどいいと思うが、もっと詳しい説明もあればいいと思った。 | 1 |

**（3）　表示（文字の大きさや表現）はいかがでしたか**

| | |
|---|---|
| よい（よい、ちょうど良い、適当） | 5 |
| 文字の大きさは読みやすいサイズで良いと思う。 | 1 |

**５　この展示の中で、面白かったことがあればお聞かせください。**

・ナチスの時代の情報が判ったこと
・ドイツの退廃芸術展について知りました。
・関連資料コーナーで知識を深められてよかった。
・中村文庫の朱の書き込み
・悪書追放運動のように近現代、新憲法下でも行われていたことが興味深い
・処分を免れた書物の展示が面白かった
・展示のテーマからは外れますが、「防空演習」などの絵（ドローイング）自体が良い
・『ドイツ芸術の日』が面白かった。文化財の破壊は、物そのものを壊すことだけではなく、退廃芸術として作品を貶めることもその一つなんだということが面白かった。
・写真の３Dが面白かった
・［“Historische Kronyck”は］ネット上でしか見たことがないのでやはり実物は印象が違う。思った以上に大きく、重そうだった。
・焚書の時代背景が説明されていると思った。机［上］に［展示に］関連する書物が選ばれて、［付箋による参考］頁等の紹介もあり、全体像がつかめました。
・立体視がカンタンに見ることが出来てすばらしい。
・アンネの日記に関してキャプションがなかったのでよく分かりませんでした。古書が見られて良かったです。
・ステレオ写真※と専用メガネ（のぞいて見ても何も意味のある形は見えなかったけれど、３D映像の研究が昔からあったことに感動した）
※専用眼鏡にセットするステレオ写真は週に一度交換。当該日は、クルト・シュヴィッタース作《メルツ絵画》のステレオ写真をセットしていた

**６　今回の展示のテーマについてお考えになったことや感じたことをお聞かせください。**

・よい企画です。もう少し資料があると思ったのですが―
・文化的なものを破壊するということはいろんな意味をもつのだなあと思いました。あと知る権利についても考えました。
・世の中の変化、歴史の変化を感じます。きちんとした資料が保管され、今後も市民に展示されることを望みます。平和な社会をつくるために、文化は豊かでなくてはならないと感じます。
・表現や言論はそれがどんなまゆをしかめるようなものであっても、守らねばならないと再確認した。歴史をくり返さないようにしたい。
・時の論理的でない、ポピュリズムの恐ろしさを感じる。
・↑［処分を免れた書物］の本はもっと見てみたい
・このような資料（ゴットフリート※）が身近にあることを知って驚いた。
※“Historische Kronyck”の意
・中国の始皇帝による焚書、日本軍が北京で行った焚書等の資料もほしいと思いました
・図書館の本・雑誌の切抜等増えているそうです。啓発をお願いします。

**７　そのほかご感想ご要望があればお聞かせください。**

・パンフレットがあるといいですね！
・これからも展示に期待しています！
・出品目録に、説明文のほうもあわせて記載すれば良いと思う。見開き２ページを超えている雑誌の記事は見開き部分以外のコピーを併置して読めれば尚良い。
・前期、後期に分けるのはもったいないと思いました
・資料の複写を当日でも可能なようにできればなお良かった。
・小規模な展示ですが、これをきっかけに同じテーマについてもっと見てみたいと興味がわくような内容でした。
・キャプションの紙が薄くて浮いているのが気になる。
・不用な美術館の入場券を買って失敗しました（1800円）。係の方が大変親切でした。感謝！
・秘密保護法等々、昨今の日本の危うい状況の中、このようなテーマは素晴らしいと思いました。これをスタートにして芸術、文化面での市民への問題提起、意識の発信をしてほしいと思います。
・企画展示今後もいろいろ続くと良いと思います。
・もっとわかりやすい案内表示をお願いします。たまたまレストランを訪ねてきて見つけたけれど、レストランがやすみだと知っていたら来なかった。

**８　お差支えのない範囲で結構ですので、ご本人様について教えてください。**

（1）　性別　男性：1　　女性：9
（2）　年齢　20代：1　30代：5　40代：1　50代：4　60代：4　70代以上：1
（3）　職業　主婦：3　社会人：8（業種／卸売：1　学芸員：1　自営業：2　教員：1　フリーランス（クリエイター）：1　無記入：2）　無職：4
（4）　住所　横浜市内：9　神奈川県内：2　そのほか：5（東京都：4　無記入：1）

㊟　※、[]内は筆者が補足した。

## 表８　他館の資料展示実地調査結果

| | 展示名 | 会　場 | 会　期 | 展示形式（原資料） | | 展示対象 | 補助具 | 配布物 | 章 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 主 | 副 | | | | | |
| 1 | 第28回<br>話のたね<br>特撮 | 国立新美術館<br>アートライブラリー | H26年<br>８月19日㈫～ | 資料コーナー | | 展覧会カタログ、和書 | タイトルパネル、導入パネル、出品目録 | なし | ［３部構成］ | |
| 2 | 近藤竜男<br>旧蔵資料<br>公開記念<br>展示part ２ | 国立新美術館<br>アートライブラリー | H26年<br>７月16日㈬～ | ケース内展示 | | 展覧会カタログ、案内状、雑誌、印刷物、展覧会カレンダー | 導入パネル、キャプション、解説パネル | なし | なし | 別館閲覧室に保管されている資料の中から展示 |
| 3 | 東京都立<br>中央図書館<br>「東京文化財ウィーク2014」<br>参加企画展<br>江戸城本丸大広間<br>―権力の舞台装置― | 東京都立<br>中央図書館<br>４階企画展示室・多目的ホール | H26年<br>10月25日㈯～<br>11月９日㈰ | ケース内展示<br>額装展示 | 資料コーナー<br>ビデオコーナー | 古文書、古地図、絵図、浮世絵（重要文化財含む）、模型 | 導入パネル、キャプション、解説パネル、個別資料解説、アンケート | チラシ、展示解説（和・英）、参考資料、参考文献リスト | ４章構成 | 多目的ホールにて関連ビデオ、資料コーナー、複製品（浮世絵・古地図等）展示。図書館員によるレクチャー実施 |
| 4 | ミニ展示<br>「紅葉三昧」 | 東京都立中央<br>図書館３階 | H26年<br>11月７日㈮～<br>12月３日㈬ | ケース内展示<br>資料コーナー | | 和装本（折り本）、和書 | タイトルパネル、キャプション | 出品目録 | なし | |
| 5 | ミニ展示<br>「浪漫の香り<br>―詩歌雑誌『明星』」 | 東京都立中央<br>図書館１階 | H26年<br>９月５日㈮～<br>11月５日㈮ | ケース内展示 | | 古雑誌 | | なし | なし | |
| 6 | 日本近代文学館　2014年度<br>秋の特別展<br>「芥川賞・直木賞　原稿コレクション展―所蔵原稿・初版本を中心に―」 | 日本近代文学館 | H26年９月27日㈯～11月22日㈯ | ケース内展示 | | 原稿、自筆文書、和書、和雑誌、時計、写真パネル | キャプション、導入パネル、解説パネル、個別資料解説、順路案内図 | チラシ、出品目録 | ４部構成 | 映画化作品コーナー |
| 7 | 都立多摩川図書館「東京マガジンバンク」企画展示　東京オリンピック50周年記念事業<br>「雑誌に見る東京駅100周年　新幹線50周年」 | 東京都立<br>多摩図書館 | H26年<br>11月14日㈮～<br>H27年<br>１月７日㈬ | 資料コーナー | ケース内展示<br>額装展示 | 和雑誌、和書、新聞、ポスター | キャプション（付箋型）、導入パネル、解説パネル | チラシ、出品目録 | ６章構成 | |
| 8 | 神奈川県立図書館開館60周年記念展示<br>コレクション紹介シリーズ第３弾<br>「戦時文庫」 | 神奈川県立<br>図書館<br>本館１階<br>展示コーナー | H26年<br>８月15日㈮～<br>11月12日㈬ | ケース内展示 | | 戦前・戦中刊行の和書、年表、写真パネル | キャプション、導入パネル、解説パネル、個別資料解説、結びパネル、写真パネル、アンケート | チラシ、出品目録 | ７章構成 | |
| 9 | 神奈川県立図書館開館60周年特別記念展示<br>写真・家具・図書館用品が語る60年の歴史 | 神奈川県立<br>図書館<br>本館１階<br>展示コーナー | H26年<br>８月15日㈮～<br>11月12日㈬ | ケース内展示<br>備品展示 | | 図面、和書、和雑誌、家具、図書館用品、パネル | キャプション、導入パネル、解説パネル、個別資料解説、結びパネル、写真パネル、アンケート | チラシ、出品目録 | ３章構成 | |
| 10 | 「横浜をつくった実業家」<br>―高島嘉右衛門没後100年展― | 横浜市立<br>中央図書館<br>３階ヨコハマ資料展示コーナー | H26年<br>９月30日㈫～<br>10月30日㈭ | ケース内展示 | 資料コーナー | 和書、古書、錦絵、古地図、写真パネル | キャプション、導入パネル、解説パネル、個別資料解説、写真パネル、アンケート | チラシ、出品目録 | ３章構成 | |
| 11 | リレー展示<br>「翻訳された聖書」 | 横浜市立<br>中央図書館 | 不明 | ケース内展示 | | 古書 | キャプション、導入パネル、解説パネル | | なし | |
| 12 | 「記憶という芸術@図書館～ヨコハマトリエンナーレ2014応援プログラム～」 | 横浜市立<br>中央図書館<br>５階<br>エレベーター前 | H26年<br>９月２日㈫～<br>11月３日㈪・祝 | 資料コーナー | 額装展示 | 和書、展覧会カタログ、パネル（プレスリリース、ポスター） | 章タイトル表示、アンケート | | あり | |
| 13 | 平成26年度<br>神奈川県立公文書館第２回企画展示<br>「基地県」かながわと人々 | 神奈川県立<br>公文書館<br>１階展示室 | H26年<br>10月17日㈮～<br>H27年<br>３月31日㈫ | ケース内展示 | | 公文書、私文書、古文書、新聞記事、写真パネル、年表、模型 | キャプション、導入パネル、解説パネル、個別資料解説、写真パネル、アンケート | チラシ、出品目録 | ４章構成 | |
| 14 | 極限の時代における独裁と民主主義<br>20世紀ヨーロッパ史を照らし出す光 | 奈良県立<br>図書情報館<br>２階セミナールーム横 | H26年<br>11月５日㈬～<br>14日㈮ | パネル展示 | | パネル<br>（解説、写真） | 看板<br>（タイトル、会期） | パンフレット（カタログ）、関連図書リスト | 25章構成 | |
| 15 | 図書展示<br>「歴史としての'80S」 | 奈良県立<br>図書情報館<br>３階ブリッジ | H26年<br>11月１日㈯～<br>12月27日㈯ | 資料コーナー | | 和書 | 導入パネル、章立て表示 | 出品目録 | ３章構成 | |

# Book Exhibitions at the Art Library (Art Information and Media Center) of the Yokohama Museum of Art【Summary】

OKITSU Miyuki, TANIGUCHI Wakako

The Yokohama Museum of Art has specialized art library. It has a collection of over 105,000 items, including Japanese and foreign-language books and catalogues. The Library organizes special educational programs in addition to its basic services of helping visitors find reference materials and managing access to the materials in the closed stack room. The book exhibition of the library collection, the theme of this article, is an example of such a special educational program. The exhibitions of selected library resources are based on a particular theme for a certain period of time. There are two types of such exhibitions: open displays, in which the materials are placed on a rack or table, and case displays, in which the materials are placed in a display case in the reading room. From 2008 to 2010, the Library presented eleven exhibitions in case display designed to help museum visitors better understand art exhibitions held in the museum. These supplementary exhibitions can be effective if the found materials with the content related to the exhibition are appropriate to the display in a case. There are cases, however, in which materials directly related to the title of the exhibition cannot be found in the library collection or there is no clear connection between the museum exhibition and that of library resources. Between 2011 and 2013, the Library held an exhibition of catalogues from the collection which was unrelated to an art exhibition in the museum. Exhibition catalogues with creative designs were exhibited in order to introduce some of the special features of the library collection to visitors. In book exhibitions supplementing art exhibitions, as mentioned above, library materials are seen as information media with an emphasis on content. In this exhibition of catalogues, the emphasis was on the catalogues (books) as physical objects. Unfortunately, visitors did not pay much attention to this exhibition. The exhibits were changed three times under the same theme, but perhaps because subtitles were not added to indicate the difference from the previous exhibition, people were not aware of the change. As librarians, we felt that it was problematic to present books in a display case since they are meant to be held in the hand and read, and we studied the programs of other libraries to find better ways of doing displays. The Kanagawa Prefectural Library had held an exhibition of its resources entitled "Wartime Library," based on research by its librarians. The display was divided into sections and explanatory comments were provided on wall panels for easier understanding. The presence of actual books and documentary materials clearly conveyed the atmosphere of the time and the enthusiasm of readers. This "Wartime Library," a special collection of library resources selected with attention to content, combined two ways of seeing books, as information media and as physical objects. A little before this study was conducted, from August to November 2014, our Library hold an exhibition of a similar tendency called "What is Book Burning?: Prohibition of Books and Cultural properties" (below referred to as the "Book Burning" exhibition).

The theme of the "Book Burning" exhibition was related to "Art Fahrenheit 451," the title of the Yokohama Triennale 2014, which was being presented at the same time. This title came from a science fiction novel *Fahrenheit 451* by Ray Bradbury. The protagonist of the novel lives in a society where reading is forbidden, and the experience to witness book burning awake him to his desire for intellect. Morimura Yasumasa, the artistic director of the triennale, carried out a performance of burning a book shown in the exhibition with reference to the novel. The burning book was a source of light projected on "innumerable forgotten memories which are not considered worth remembering in real society," that Morimura associated with "forgotten people" who in the Bradbury's novel learned books by heart.

What sort of book burning are found in factual history rather than in novels or artistic actions? A survey

of examples of book burning in the library collection showed that books have been prohibited by a variety of historical actors for a variety of purposes in different regions and historical periods, not just as a result of political repression. Books have been subject to publication bans and various kinds of physical mutilation as well as burning. Other cultural properties, including works of art, have been attacked for similar reasons and motives. Therefore, the category of things subject to banning was expanded to books and cultural properties and the methods of attacking them were categorized more widely as "vandalism." By showing historical examples of "vandalism directed against books and cultural properties" with materials from the collection, we aimed at getting visitors to think more deeply about these harmful acts. Who has carried them out, when and where? What was harmed, how and for what purpose?

The exhibition was structured in four sections, covering a period from the Protestant Reformation to the years after the Second World War. It included rare books like Gottfried's *Historische Kronyck*, Geisberg's *Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts*. and an official album of stereoscopic photographs commemorating *Tag der Deutschen Kunst* published by the Nazi German Government. Bibliographical notes were added for books and periodicals and images. Explanatory panels were provided where necessary. The exhibition was divided into two periods so that 21 items could be presented in two display cases with limited space. An open display was presented on a table in the reading room where books could be handled and perused. The list of exhibits for the case display and the open display were produced (Tables 4 and 5) as records of the exhibit. The Library's image bank, one of its special features, made it possible to trace the history of banned books through image resources such as prints and photographs. These materials demonstrated how the vandalism directed against books and cultural properties has been recorded so as not to be forgotten. A written questionnaire was administered in the Library during the "Book Burning" exhibition. Typical comments were: "I learned about the Nazi 'Degenerate Art' exhibition in Germany," and "I reaffirmed the importance of protecting expression and speech even if the content is somewhat dubious" (Table 7). This exhibition provided an opportunity for visitors to think about the history of suppression , injuring and defamation of books and cultural properties and the present situation of art and culture with regard to freedom of speech and the press. Librarians took the initiative in setting the theme and providing commentary on the content. By structuring the exhibition in this way, it was possible to produce an effective thematic exhibition that regarded books as both information media and physical objects. As librarians, we would like to continue actively organizing materials exhibitions based on careful study of the resources in the library collection.